新藏經釋因緣聖話

明治
42 1 7
内交

自序

因緣說法は譬喩說法と共に大藏經中に在つて一異彩を放つておるものであるが、而も世人は未だ多く其眞趣を解しておらぬように思はる。何故かと云ふに、單に因緣談と云ふと、多くの人々は、荒唐不稽の物語か、さなくば平凡なる浮世話のように思ふて了ふ傾がある。然れども是れ大に誤れり。

藏經中の因緣說法なるものは決して左樣なものではない。是れは正しく因果必然の大則を顯示したるものであつて、其說き給ふ所の話題は、多くは孝悌友愛の慈訓にして、而も大聖世尊が其過去世に於て實行せられし事蹟が、主要の部分となつておるのである。されば因緣說法は或一面より觀察するときは、大聖世尊の過去世における半面の歷史的事實談であると共に、又他の一面に在つては、佛道修行とは抑又如

何なることを爲すのであるかとの疑問に對する解答とも見ることが出來るのである。從つて苟も大聖世尊の遺敎を遵奉して、向上の一路を辿らんと欲する修道の士に在つては、斷じて看過してはならぬ所のものである。

是れを昨春大方諸賢の机邊に呈したる譬喩聖話と對照するときは、彼れは、寸鐵殺人的の警句を以て充されてあるが、此れは此の如き鋭鋒は現はれておらぬも、而も諄々として道を說いて倦まざる底の親切が、卷中に横溢し、如何に愚かなるものと雖も、必ず首肯せしめねばおかぬと云ふ眞情が含まれておる。されば譬喩說法は嚴父の慈訓の如く、三冬天を氷らす底の肅殺の氣風が抱持せられ、因緣說法は悲母の甘言の如く、九春和鳴の溫情が流露しておる。要するに彼れは兄也、此れは妹也、兩者の間には分離すべからざる密接の關係を有しておることである。

る。

大藏經中因緣談を說くもの甚多し、就中、雜寶藏經、雜藏經、百緣經、阿含經、賢愚經及六度集經等を其最もなるものとす。本書中に記載したるものは、多くは是等の經典により、他は律部の諸經中に散說せられたるものを拾拾したるものである。若夫れ八萬の法藏中、隨處說示の妙話に至つては、他日再び筆硯を洗ふて類集せんことを期す。

終りに、本篇の編述に當り、學友長等神立君の力をかることと大なるものあり、是れに依つて、君に請ふて署名の諾を得、君と余との合著とした

明治四十一年八月

洛水客寓に於て

河崎顯了識

藏經新釋

因緣聖話

目次

一　怨の本源……一頁
二　小羊の述懷……十一頁
三　神主の前生……十五頁
四　夢の判斷……十八頁
五　眼の布施……三十一頁
六　鸚鵡の說法……三十八頁
七　紀念の靴……四十一頁
八　老父の門番……五十一頁

九　阿難の聰明……五十四頁
一〇　餓鬼の教誨……五十七頁
一一　亂打の三歸……六十八頁
一二　姦婦の現罰……七十三頁
一三　二人の內官……八十一頁
一四　延命の神術……八十五頁
一五　天魔の難詰……八十七頁
一六　七日の大王……九十九頁
一七　無言の說法……百六頁
一八　怪魚の問答……百九頁
一九　恒伽達の得道……百十五頁

二〇　貧女の一燈……百二十五頁
二一　尊者の勤勞……百二十九頁
二二　火坑の太子……百三十三頁
二三　盜賊の發心……百四十四頁
二四　醜女の歡喜……百五十四頁
二五　鸚鵡王の諫言……百六十三頁
二六　大逆の應報……百七十頁
二七　受齋の二梵士……百七十四頁
二八　純孝の王子……百八十三頁
二九　世相の半面……百九十頁
三〇　惡緣の纏縛……百九十九頁

目次

三一 七天人の述懷……二百四頁
三二 瞋恚の怪火……二百十四頁
三三 一句の教誨……二百十八頁
三四 捨身の博愛……二百二十五頁
三五 無法の祈願……二百三十一頁
三六 身口の籠……二百三十五頁
三七 赤魚の大悲……二百四十二頁
三八 長者の遺言……二百四十九頁
三九 慳貪の應報……二百五十四頁
四〇 餓虎の救助……二百五十九頁

以上

藏經新釋

因緣聖話

河崎顯了
長等神立 共編

一 怨の本源

昔優塡王の皇子に娑羅那と云ふ方があつたが、年少の頃より思を佛道にひそめ、遂に出家して比丘となり、山林に入つて禪思を凝らされた。

或時、惡生王が多くの後宮の采女を引連れて山林へ遊行して來られ、恰も比丘が修行しておらるゝ林中にて休憩せられた。王は終日の遊行に疲れて假睡して了ばるゝと、諸采女は其暇に、思ひ〳〵に諸方へ散亂し、互に相戲れておつたが、その中に不圖前方の大樹の下に、一人の比

丘が坐禪しておるのを發見し、諸共に其許に赴きて說法を聽聞した。

其中に王は假睡の夢より醒めて、諸采女を覓められたが、あたりには一人も居らぬ。どうしたことかと不審を立てゝ索ねらるゝと、遙かあなたの大樹の下に顏貌端正の年少比丘を取り卷いて聞法しておるとがわかつた。王は直ちに比丘の許に赴き、辭劇げしく尋ねらるゝようは、我が比丘よ、汝は阿羅漢道を得たるや、否やと。

比丘は答ふ。未だ是れを得ずと。

王曰く。阿那含を得たるや、否や。

比丘は答ふ。未だ是れを得ずと。

斯陀含は如何。

未だし。

須陀含は。

それも未だし。

然らば不淨觀は如何。

なか〳〵に證り難しと。

茲に惡生王は大に怒つて云く、汝未得道の凡夫の分際にてありながら、我諸采女を膝下に集むるとは不屆至極なりとて、卽ち携ふる所の杖を振り上げ、打ちすへ打ち下して、比丘の遍身を傷壞にした。此の有樣を觀めたる諸采女は、比丘に過なき由を述べて、ひたすら王の怒をなだめんとしたるに。王はうたゝ益々怒つて亂行の鞭をつゞけられたれば、諸采女は如何にせんかと啼哭懊惱した。王の怒りはたゞいやますばかりである。

此時、比丘は心中に思ふようは、過去の諸佛は皆能く忍辱を行せられしが爲め、能く無上道を證られたのである。又且つ聞く、昔は忍辱仙人

は他の爲めに耳鼻手足を削られしも、而も能く是れを忍びたりとか。是れを思へば今我が全身は完固にして、一處を切り捨てられず、是れしきのことにて我が修行を破るべきかと。向上の一念奮然として湧起せしかば、默然として王の爲すが儘に打任かした。

娑羅那比丘は、一念の向上心に引き立てられて、惡生王の殘酷の處置を忍んだが。王の去ると共に、肉體の疼痛は、刻一刻に劇しくなり、殆んど其痛みに堪へられなくなつて來た。未得道の悲しさには、折角の道念も次第に消え失せ、反之て悲憤の妄念は胸を衝いて湧出した。我れも昔は一國の皇子なり、在俗して父の王位を紹ぐ時は、權勢比びなき國王となり、兵衆の勢力も、決して彼れ惡生王には劣らず。然るに今は孤獨頼るなきの修行者となれる悲しさには、かくも不法の亂打を蒙つて、遍身疼痛の苦惱を受くるのである。嗚呼、先途は遠く、證の光りも認め

難し。若かず今より歸つて國君となり、今日の恨みを晴らさんかなと。淺間敷き妄念に驅られたる比丘は、直ちに其師迦栴延の許に參つて、所志を述べて還俗せんことを願ふた。

迦栴延尊者は比丘の物語りを詳細に聞取つて、やがて申すようは、それもよかろう、爾かし見受ける所全身傷壞しておることなれば、今晩は自分の許に宿泊して充分身體を攝養し、明日歸途に就くことゝするがよかろうと。比丘はなさけある恩師の辭にはだされ、云はるゝ儘に一宿することゝした。

其夜、比丘は夢を見た。

比丘は優塡國に歸へつたるに、父の王は既に崩御せられておつた。それで自ら王位を紹ぎて九五の位に昇り、大に四部の兵を集めて惡生王を伐つた。然るに武運拙なくして反つて敵王の爲めに打ち破られ、

身は乍ち囚虜の辱めを受くることゝなつた。惡生王は臣下に命じて斬捨てしめんとした。此時比丘は大に怖畏し、心の中に、願くば生前に今一度恩師を見ることを得ば、假令ひ他の爲めに殺さるゝとも少しも憾みなしと思ひたるに、時を移さず迦栴延尊者が、錫を執り鉢を持て眼前に現はれ、比丘に對して言はるゝには、我は常々汝に對して種々の法を說き、闡譯して勝を求むるとも、終に得べからずと申聞かしたるに、汝は我が敎を用ゐざるが爲めに、今日遂に楚囚の身となつたのである。汝の心中如何に感ずるかと。

その時比丘は泌々と恩師の敎誨が胸にこたへたので、恩師に對し、恩師よ、願くば我が命を救濟せられたし、爾る時は我は決して再び恩師の敎へに違ふことは致さじと申した。すると尊者は執刀の兵に對して、暫く此者の命を斷つことを見合はされたし、我は今より大王の許へ參

つて、此者の命請ひを致すべければと申されて、直ちに王宮を指して急がれた。然るに執刀の兵士は暫時の間も猶豫せずして、一刀の下に斬捨んと致しかけたる故、比丘は思はずギャッと叫んだ。我と我が聲に驚かされて、不圖眼が醒めた。總身に冷汗を流しておつた。而も是れは夢であつた。

娑羅那比丘は翌朝早々尊者の膝下へ參つて、昨夜の夢物語りをなしたるに、尊者は容を改めて申さるゝは、生死戰鬪には都て勝つと云ふことはない。其故如何んとなれば、抑も戰鬪の法たるや、他を殘害するに非らざるよりは決して勝利を得ることは出來ぬ。爾るに此殘害すると云ふことは、明かに是れ怨情に迷はされて行ふことであつて假令ひ一時は勝利の快心を得ることあるも、將來の世には長へに三途に墮在し、苦毒無量なるべし。若し夫れ戰ふて敗れんか、身は乍ち敵の爲め

に殺害せられ、加之ずそれが爲めに罪なき多くの人々に重罪を造らしめ、死して地獄に墮して、更に互に殘殺し、寃家息まず、五道に輪轉して終竟あることなかるべし。汝能く反覆熟慮すべし。此の如くにして果して能く今の汝の瘡桎楚痛に少補あるや如何。

尊者は更に語をすゝめて、汝は今現に生死の怖懼と鞭打の痛みとを離れんと欲するものならんが、若し然らば、當に自ら己身を觀じて、怨謗を息むことを勉めざるべからず。汝、靜かに觀ずべし。此身は是れ衆苦の本源なることを。思へ、饑渴寒熱は汝を苦しむならずや。生老病死も亦免ることを能はざるに非ずや。蚊虻毒獸の侵害も亦如何んとも すること能はざるに非ずや。數へ來らば此の如きの諸害衆多無量なるべし。而も汝は是等の迫害に對して、其恨みを報ゆること能はざるべし。然るに何ぞ獨り惡生王にのみ是を報ひんと欲するか、汝實に誤

れり。

尊者の敎誨は益々剴切を極め、論旨は愈々鋭鋒を顯はし來り、更に辭を繼ぎて。

汝怨を滅せんと欲せば、當に須く先づ汝の煩惱を滅すべし。煩惱の怨害は實に無量なり。汝一身の怨害は假令ひ如何程重くとも、それはたゞ汝の一身を殘害するのみなり。然るに煩惱の怨害は正しく善法を滅するに非ずや。一身の怨害はよし酷なりと雖ども、たゞそれ有漏臭穢の身を害するに止まり、決して其他に及ばざるべし。されば怨害の根元は明かに煩惱に在りと知れ。愚かなる汝は此理に暗くして、怨害の本源たる煩惱を伐つことを忘れ、徒らに惡生王を伐んと欲す、惑へるの甚しきなりと。理を究め情を盡したる尊者の說法には、沙羅那比丘も非常に感動し、今は怨恨の思ひも跡なく消へ、奮然として道に進みしかば、

幾程もなくして大阿羅漢果を證悟した。

＊　＊　＊　＊　＊

明師には遇ひたいものである。古聖の慈訓は聞かねばならぬものである。迦栴延尊者の怨害に對する訓戒は私共に對し、實に言ふべからざる教訓を與へらるゝものである。如何にも私共は饑寒と蚊虻に對しては怨みは述べぬ、生老病死に對しても如何んともすることは出來ぬ。然るに同胞の迫害を受くると、寸毫も許容せぬのである。縁の遠い蚊虻には小言を云はずして、近い人類に容赦が出來ぬとは、誠に本末を誤れるの甚しきものと云はねばならぬことである。

然れども、人と虫とはちがふがゆへ、是を同一にすることは出來ぬと、逃口上が言ひたくなるが、而も考へてみると、お互に我が子が横着したからとて、そんなに腹立ちは致しはせぬ。それに我が兄弟とか朋友と

かゝ少しにても非法のことを行ふと、乍ち奮然として是を責むるのである。してみると怨恨の心は全く己れの狭量にもとづくものである。としか解することが出來ぬ。狭量の心はやがて惡魔の心である。十方衆生を招喚し給ふ如來の心は實に大宏量の至極である。從つて私共にして、一度此如來の大慈悲心の德が領解せられたならば、必ず怨親平等のひろ〳〵としたる樂天地に出でらるゝに相違ない。

佛法は氣がつまるものかと思へば、信心に御慰み候との蓮師の慈訓は、全く此邊の消息を傳へられたるものである。

二　小羊の述懐

昔、さる金滿家の隱居があつて苦勞知らずの日暮を爲し、殊に三度の食事には肉食でないと承知が出來ぬと云ふ贅澤を極めておつた。

所が、如何に金があるからといつても、毎日毎日生き物を殺すと云ふことは、人前もあることであるで、何そよい口實を設けて鮮肉を手に入れんと目論だ。

それで一日子供を連れて野原へ赴き、田頭に在る一大樹を指して、子供等に云ふて聞かすようは、我家の今日の分限に成つたのは、全く此樹の神様がお守り下されたからのことで、決して是れを疎略にしてはならぬことである。就ては今日は丁度此樹の神様のお祭り日に當つておることなれば、家の羊の中で、一番肥へたものを殺してお供へするがよいと。

子供等は老爺の命令の儘に、早速に羊を殺しておごそかなる祭禮を行ひ、且又其樹の下に立派な樹神の祠を建てた。然るに其後幾程もなく、隱居は無常の風にさそはれてあへなくも命終した。殺生業の報ひは覿面に現はれて、淺間敗も我家の羊の中へ轉生受身した。

老父の亡くなつた後、樹神の祭日がまはり來つたので、子供等はその式を行はんとて羊を引出し來り、是れを殺して神前に供へんとした。然るにその時の羊は、昔の老父の生れ代つたものであつた。それで羊はから〳〵と笑ふて申すようは、此の樹には神靈も何にもありはせぬ、實を云ふと、俺が前生お前達の親であつたとき、羊の肉の喰ひたさに、お前達を誑かしてよい加減なことを申したのである。其時の肉はお前も喰ふたではないか、今其業報が報ひ來つて、俺れは此樣に羊に生れ變つたのであると。

羊の述懷談を聞いたる子供等の驚きは一方ならぬことであつた。折好く其處へ來り合せた羅漢があつて、子供等に通力をかして、羊の前生を觀せしめたるに、果してまがふ方なき我親父であつた。

茲に子供等は非常に驚き怖れ、即座に樹神の祠を打ち壊はし、大樹を伐り倒し、父の菩提を弔ふ爲めに大法會を營み、爾來決して殺生業を犯さぬことゝした。

＊　＊　＊

打つ者は打たれ、撫づる者は撫でらる、因果の道理は恐ろしいものである。大無量壽經に曰く『世間の事かはる〳〵相患害す、即時に急に相破すべからずといへども然も毒を含み、怒を畜ひ憤りを精神に結び、自然に剋識して相離るゝことを得ず。皆まさに對生して更相報復すべし、人世間愛欲のなかにありて、ひとり生しひとり死し、獨さたり獨さりて行にあたりて苦樂の地にいたりおもむく身みづから之に當る代るものあることなし』と。業報の纒綿することは、實に此經文の示めす通りである。されば私共は、念々に自己の行爲を反省し、他日如何なる果報を受くべきものなるかを、深く戒心せねばならぬことである。

三　神主の前生

昔、或婆羅門が晝夜の別ちなく、一心不亂に摩室天に祈願を凝らしておると。或時、天神が婆羅門の前に現はれてお前はなか〳〵殊勝に願ごめするが、何が所望であるかと尋ねた。

婆羅門は、日頃の念願かなひたりと打歡び、下奴の願は、是非此祠の神主になりたひのでございますから、どうかそれを御許し下されたしと申した。

すると摩室天は、それならば、一つかしこの群牛の内のまつさきに立つておる牛に相談して來るがよいと申した。敎へらるゝまゝに牛の所へ行いて話しかけ、汝は今牛の相を受けておることぢやが、何が一番

苦勞かと申すと。牛は答へて、苦勞の事は言はれぬ程である、肋の骨は刺され背骨は薪の爲めに破られ、日夜休みなく重い車を挽かされ、どうして〳〵辛抱の出來たものぢやないと溜息ついて述べ立てた。

一体、どうした因縁で、牛に生れたのかと尋ねると。されば、なり、恥を言はぬと理がわからぬ。昔、彼處の祠の神主となつて、恣いまゝに供物を使ひ果した罰が報ひて、今日此果報を受けたのぢやと申した。婆羅門は、牛の物語を聞き了りて、ジョゲ返りて歸りて來ると。摩室天は、どうぢや神主にはなりたいかと尋ねた。婆羅門は、只今牛の物語を聞き申すと、下奴はホト〳〵嫌になりましたと答へた。

時に摩室天は、言おごそかに、人間は善惡行狀によつて、銘々に其の果報を受くるものであると申渡したので。婆羅門は、深く悔過し、爾來專心に修善の道をたどつた。

目的が名聞とか利養とかにあつては、決して、眞實の善果は、報ひ來るものでない。況んや、佛を賣り、祖を賣り、以て、自ら爲めにせんと、欲するが如きことがあると、來世は、墮獄の苦しみを免ることの出來ぬは、必定である。眞諦と云はず、俗諦と云はず、初發心が大切である。

私共、日常の勤勞は、其目的奈邊にあるか。顧て此小話を讀み、靜かに我が心中を探ると、小話は正しく私共の今世及び來世に亘る、小照の如きの感を生じ、三伏の酷暑にも冷汗が流れ出づることである。

觀無量壽經に曰く『此の如きの愚人、僧祇物を偷み、現前僧物を盜み、不淨說法して慚愧あることなし、もろ〳〵の惡業を以て而も自ら莊嚴す。此の如きの罪人は惡業を以ての故にまさに地獄に墮すべし、いのち終らんと欲する時に地獄の衆火一時に俱に至る』と。前の小話と

云ひ、今此訓言と云ひ、苟も宗門に衣食する者の、寸時も忘却してはならぬものである。

四　夢の判斷

昔、さる貧女があつて、一夏、尊者迦栴延を迎へて夏安居をして頂かんと發願した。爾し是れと云ふ資産もなき身なれば、供養料の都合がつきかねた。けれども、どうしてなりとも所願が遂げたくてたまらぬ。沈思熟考の結果、どう〳〵自分の綠なす黑髮を切つて商人に賣り渡し、五百金を得た。それで早速尊者の許へ參り、日頃の念願を述べて、來臨せられんことを願ふた。尊者も其殊勝なる志に感じ、快よく其請を容れて、一夏九十日の安居を貧女の家にせられた。

かくて安居が終つた後、城中に入つて國王に謁見せられたるに、王は

尊者に向ひ、此一夏を如何にして過ぐされしかと尋ねられた。尊者は貧女の供養に應じたことを詳しく物語られた。

王は尊者の物語を聞き、倩思はるゝは、我が後宮の婦人共の頭髮を賣るも銅錢數枚にも價ひせぬが、爾るに五百金の價値もある髮を有つておる女ならば、定めし容儀も端正なるに相違なからう、どうかして後宮へ迎へ入れたいものであると。それで尊者に對して其女の父母の姓名を尋ねらるゝと尊者は一々是れを敎へられた。

王は直ちに人を遣はして女の身の上を驗べしめられしに、案の條絕世の美人であつた。依て正式の使を出し、迎へて夫人とせんと申入れられた。女の一族の者は願くば莫大の財寶と、城邑及び聚落を賜はらば、王命に從ひ申さんと答へた。王は謂らく、迎へ取りさへすれば、先方の物はやがて自分の物となることなれば、別に損になるまいと。それ

で云ふがまゝに是れを與へ黄道吉日を擇んで、納れて夫人となし、名を尸婆具沙夫人と改め、國中に大赦令を布かれたれば、國民一般に大吉慶事であると祝賀した。

幾程もなくして尸婆具沙夫人は姙娠し、月滿ちて玉の如き皇太子喬婆羅を誕生せられた。王の歡びは譬へようの無い程であつた。

然るに其後、王が一夜八事を夢みられた。一には、頭上に火が付いおる。二には、二匹の蛇が腰の周りに巻き付いておる。三には、細鐵の網が身に纏ふておる。四には、二匹の赤魚が兩足を呑まんとしておる。五には、白鶴が飛び付かんとした。六には、血泥の中を歩まれしに、腋の下まで泥が來た。七には、大白山に登られた。八には、鶴雀が頭上に尿したことである。

醒めて後、非常に心配せられ、直ちに波羅門の許を訪ねてその判斷を

請はるゝと。波羅門は乗てより王が迦栴延に歸依せらるゝことを癪に障へておつたゆへ、此機會に乗じて迦栴延を排斥せんと思ひ。王に對して云ふには、大王、それは大變に不吉なる夢でござる、打遣つておかるゝと作ちに大王の身上に一大不幸降り來るべし、遽かに禳厭せられなければなりませぬ。

王は之を聞いて、如何にも尤ものことゝ信じ、益々憂惱を增し、どうして禳厭することが出來ようかと尋ねられた。

婆羅門の云ふには、左樣是れが爲めに使用すべき物は、孰れも皆大王の珍愛せらるゝ所の物のみなれば、只今申し上げても、とてもお許しがあるまゐと。

王は、どうして〳〵、是れは大變な夢なれば、是を禳はぬ時は、屹度大禍殃が我が身の上に降り來るに相違ない、それゆへ我が一身以外の物な

らば、何物にても少しも惜みはせぬゆへ、遠慮なく話して呉れと申された。

王は至心に悪夢を禳厭することを望まるゝ故。婆羅門は、此の上は何を云ふとも王が承知せらるべしと信じ、やがて辭を改めて申すには、左様に懇請あそばすことならばお話し申さん、此悪夢を禳ふためには、第一に大夫人尸婆具沙を殺し、第二に愛太子喬婆羅を殺し、第三に輔相の大臣を殺し、第四に王の所有の鳥を殺し、第五に王の廐にある一日能く三千里を走る神象を殺し、第六に同じく三千里を走る駱駝を殺し、第七に王の良馬を殺し、そうして第八に王の尊重せらるゝ迦栴延を殺すのである。今後一七日の間に於て、如上の事を實行せられ、其血を集めて密行を修したならば、屹度災害を除き得べしと言上した。

婆羅門の要求は、孰れ一つとして重大ならぬものはなきも、王も自身

の命とはかへられぬ爲め、澁々ながらそれ〴〵實行すべしと約せられやがて徜をめぐらして宮中に還御せられたが、何分にも八事を實行すると云ふことは容易ならぬ事であるゆへ、王は一方ならず愁憂悶惱せられた。尸婆具沙夫人は、王の顔色の常ならぬことを觀められ、何故にかゝる御容態にて在すかと尋ねられたるに。王も何時迄も包むことが出來ぬものと思はれ、夢の次第と婆羅門の希望とを詳細に物語られた。

是れを聞きて夫人の申さるようは、數ならぬ賤妾の身が、萬一にも役立ち申して、大王の御身が平安無患と成り給ふことならば、私は歡んで一命をお差上げ申すべきにつき、此の一事は毛頭御配慮下さるに及びませぬ、就ては今日より七日の間、迦栴延尊者の許に參つて受戒聞法仕りたし、此儀は是非に御許容下されたしと懇願せられた。

王は、其許の親切の程は今更ながら感じ入ることであるが、然し迦栴延の許に赴くことのみは、斷じて許し難し。其故は其許が先方に參つて實を明したならば、彼れは必ず難を免れて遠方に去るに相違ないと申さると、夫人は、尊者の日頃の性行を述べて、決してかゝる不德なることを行ふが如き方ではなきことを申述べ、ひたすらにおのが願ひを許されんことを嘆願せられた。それで王も遂に夫人の願意を聞屆けられた。

夫人は直ちに用意をとゝなへて尊者の許へ訪ね、連日慈心に受戒聞法し、いつ宮中へ歸へらるゝと云ふ樣子が見へなんだ。尊者は不審でならぬ爲め、夫人に對して、王夫人は今日迄は一度も拙僧の許に宿泊せられしことなきに、何故に此度に限つて、かくも長くお留りなさるかと尋ねらるゝと。夫人は、つぶさに王の夢物語と、且つは婆羅門が是れを

禳ふ爲めに、八大事を實行すべきことを王に勸めたと云ふことを打ち明され、かゝる理由なれば、自分の餘命も幾ばくもなければ、今はかく後生菩提の爲めに聞法仕るなりと申述べられた。

迦栴延尊者は是れを聞きて申す樣は、それは決して惡夢では御座らぬ誠に芽出度き吉夢にして、今に歡慶の事が顯るべし。先づ第一に王の頭上に火が燃へたと云ふのは、寶主國に十萬兩の天冠があるが、それを彼の國王が大王の所へ獻上して參ることである。

王夫人は、七日の後には殺さるゝと云ふ心配があるゆへ、心急ぎでならぬ。それゆへ尊者に對して、それが若し本當ならば、幾日頃に到來致すべきかと尋ねらるゝと。尊者は、左樣、今日の晡時には必ず到着すべしと答へた。

尊者は話を進めて、兩蛇が腰に卷き付くは、月支國王が雙劍の値ひ十

萬兩なるものを献ずることであつて、是れも今日の夕方には參るべし。細鐵網が身に纏ふは、大秦國王が珠瓔珞の値ひ十萬兩なるものを献ずることにして、是れは明朝お手に入ることならん。赤魚が足を呑むと云ふ夢の告げは、師子王國の王より毘琉璃の寶履値ひ十萬兩の物を送らるゝことにして、是れは明日の朝食頃に來るべし。白鵠の來るは跋耆國が金寶車を献ずる知らせにして、是れは明日の日中頃に到着せん。血泥中を歩まれたるは安息國王より鹿毛の欽婆羅衣を送らるゝことにして、その價値十萬兩ならん。是れも明日の午後には參るべし。其他太白山に登らるゝの夢は、曠野國王より大象を献ずることにして、是れ又明日中に來るべし。たゞそれ鶴雀が大王の頭上に尿するの一事は、王と夫人との私行上に亘ることとなれば、孰れ他日思ひ當らるゝことあるべしと申された。

斯くて迦栴延尊者の豫言は空しからず、諸王國よりの献上物は、時をたがへずして到來した。王の歡びはなゝめならず、婆羅門の計畫は見ん事失敗した。

尸婆其沙夫人は、是れ迄で着けておられた天冠の上に、寶主國王より献じ來れる寶冠を頂き、一倍の美容を増されたことであつた。

一日、夫人は王と戯むれておらるゝと、王は夫人の寶冠を奪ひ取つて、金髮夫人にかむらしめられた。すると夫人は大變に立腹して申さるようは、何かにつけて悪い事は自分が先最初に當り、善ひ事と云へば、いつも金髮夫人が先きに立たれる、こんな心悔なことはないとて、あたりにあつた牛乳入れを取つて、王を目掛けて投げ付けられたれば、乳は溢れて王の頭を汚した。

王は大立腹にて、劍を扱いて一打ちにせんとて夫人を逐はれたれば、

夫人は畏れて直ちに自分の房中に馳せ入り、内より堅く戸を閉ざゝれたれば、王は進んで房中に入らるゝことが出來なかつた。

此時王は倩ら思はるゝようは、嘗さに尊者が我れと夫人との間の事に於て、思ひ當ることがあるべしと申されたのは、正しく此事なるべしと、一念大悟せられた。それで早速夫人に其旨を通じ、夫人と同乘して尊者の許へ赴かれて申さるゝようは、さきに非法邪惡の言を信じて、幾んど尊者妻子大臣所愛の物の上に、大非行を行はんと致したるに、幸に尊者の教誨を蒙むつて、大惡事より免がるゝことが出來、實に年來の盲冥を開いたることである。此歡びと幸ひとは、言にも盡されじとて、叮嚀なる感謝の辭を述べらるゝと共に、大に尊者を敬奉供養し、諸婆羅門を驅つて盡く國境外へ放逐して了はれた。

かくて王は尊者に對して、何んの因縁あつて、かくも諸國王より自分の許へ珍寶を送り來るかと尋ねられしに、尊者は是れを說明して、乃往過去九十一劫の昔、毘婆尸佛出世の砌り、槃頭國の太子が深く佛法を信樂せられ、佛を供養せんが爲めに自分の天冠を始めとし、寶劍瓔珞大象寶車欽婆羅衣を悉く佛に上られた。此一大事因縁に依つて、世々尊貴の家に生れて、求めずして欲する所の珍寶を獲らるゝのである。而して王は卽ちその時の太子であると申された。

* * * * * *

陰德を積んで子孫の爲めにせんとは溫公が遺した訓言である。然れども是れは決して子孫の爲めのみではなくして、全く自分の爲めとなるものである。汝に出でたるものは必ず汝に歸へるものである。私共は我身が可愛ければ、勉めて此德をつまなければならぬことである。

貧女が綵りなす髪を切つて迦栴延を供養すれば、それが乍ち一大事因縁となつて、やがては一國の王妃となり。昔、佛を供養したる太子は、今は期せずして珍寶を得られた。宇宙の中には、有は決して無と變じはせぬ、一度蒔きつけたる種子は、必ず若芽を出す時がある。されば私共は彼の大經の、「こゝにして善を修すること十日十夜せんは、他方諸佛の國土に於て善をなすこと千歳するに勝れり。所以はいかん、他方の佛國は善を爲すものは多く、惡を爲すものは少し」との金言に從ふて、心丈夫に善行を勵まねばならぬことである。

眞理と虚妄とは、兩立すべきものではない。暗黒の時には燐火もその光を放つが、太陽が出づると乍らその光徳を失ふて了ふものである。非理邪行の婆羅門の徒が辭巧みに大王を誑かさんとしても、迦栴延の大光明は、到底是を暗ますことは出來ず、反つて國外へ放逐せられたではないか。世に一時惡人が時めくことがあつても、私共は少しも眞理を疑ふことは入らぬ、屹度一度はその大光明が輝き渡つて、百鬼千魔をして、その醜態を顯はす、餘地なからしむるものである。今此一小話は、明かに如上の眞理を敎ゆるものである。

五　眼の布施

昔、世尊が祇樹給孤獨園に在しゝ時、尸婆と云ふ盲目の比丘があつて、衣を縫はんとしたが、悲しいことには糸が針に通らぬ。それで聲を立てゝ、誰にても福徳を積まんと欲する者は、どうか此の糸を針に通してくれんかと申した。

世尊は比丘の唱言を聞かれ、よし〳〵自分が通してやらふとて、早速立つて比丘の許に赴かれ、自ら比丘の手を捉つて糸を通しかけられた。

比丘は其お話し振りにて世尊なることを覺り、深く恐縮し、恐る〳〵口を開いて、大聖世尊は、往昔三阿僧祇劫に於て大慈悲を修め、六波羅蜜を滿足し、菩薩の行を具足して一切の煩惱を斷じ給ひ、功德滿足しましまして、何を苦んで弟子を助けて、福德を求め給ふかとお尋ね申し上げた。

世尊は答へて、我は過去世の宿習を忘れぬ爲めに、今復汝の所に於て福德を修むるのであると申された。

時に盲目の比丘を始め、他の諸比丘も、世尊のお話に不審を立て、夫は又如何なる宿習のおわすかとお尋ね申した。

すると世尊のお話しなさるようは、昔、婆羅捺國に尸毗大王と云ふのがあつたが、王の政治のよろしかつた爲め、國內能く治まり、人民熾盛にして、豐樂極りなかつた。王は非常に慈悲深い方であつて、常に貧民を救濟せられ、求むる者があると、財寶珠玉も惜氣なく與へられた。王の

此の行爲は、深く天地を感動せしめ、それが爲め帝釋天の宮殿を震動せしめた。時に帝釋天は倩ら思ふようは、故なくして我が宮殿の震動するは不思議の至りなり、或は我が天壽も盡きて、近き內に命終するに非ざるか、或は又他に何等かの源因あつて、かくも動搖するにや、疑れにしても解しがたき出來事なりと。それで早速觀念の定に入つて取調べてみると、全く尸毗王の惠施の行爲が、餘りにうつくしきが爲めに、天宮に感動したのであつたと云ふことがわかつた。帝釋天は王の行爲に感じ入つたが、爾かし此の行爲が果して王の衷心より出でたるものなるか、それとも浮世の名利の爲めに行はれたものではないかと云ふ點に就て、未だ了解しかね、遂に身を餓鷲に寘して、その虛實を試むることゝした。

一日、尸毗王の宮中へ一大餓鷲が舞ひ下り、王に對して申すようは、我

れ聞く大王は喜んで布施を行ひ、衆生の求むる所に逆ひ給はぬとのこと。就ては我れに一願事のあるあり、大王願くば我が心願をかなへ給はりたしと。王は答へて、如何にも布施の行を修しておることなれば、何なりとも汝が望みの物を與ふべしと仰せられた。

すると鷲は、自分は金銀珍寶及び諸々の財物に就ては少しも望む所なし、たゞ大王の兩眼をいたゞきて美膳とせんと欲するものなれば、願くば此心願を許し給へと申した。

王は鷲の所願を聞き屆けられ、直ちに利刀を執つて自ら兩眼を剜りて彼れに施され、少しも苦痛を訴へられず、あまつさへ毛頭悔恨の心も起し給はなんだ。王の行爲の見事なる爲め、天地は乍ち六種震動し、諸種の天花を雨ふらした。

好施を受けたる鷲は王に向ひ、大王今兩眼を剜つて我れに施したまひしが、かくて心に少しも悔恨し給ふことはなきかと尋ねた。

王は答へて、實に悔恨の意なしと申された。

鷲は重ねて、口には何んとでも云はるゝが、眞實恨みなしと云ふことは、何を以て證明せらるゝかと難詰した。

王は、我が云ふ所にして誤りなくば、我が兩眼は乍ち本復して元の如くなるべしと斷言せられた。すると言下に、王の眼は本通りになつて少しも前と異なる所がなかつた。

餓鷲は直ちに帝釋天の本身を現はし、未曾有の事なりと歎じ、且つ辭をつぎて、王今能く捨難きを捨てゝ大行を成す、定めて釋梵天輪聖王とならんと欲するが爲めならんかと申すと。王は、否とよ、我れは決してかゝる世俗の榮樂を願はず、我が望む所は、未來世に於て正覺を成じ、一切衆生を救濟せんと欲するに在りと申されたれば、帝釋天は益々王の

心願の殊妙なるに感じ入り、やがて天宮を指して歸り去つた。

此物語の終ると共に、世尊は諸比丘に對し、爾時尸毗王は我身にして、彼の時の鷲は盲目比丘是なり、我れは既に彼の時に於て眼目を布施して慳惜せず、故に自ら成佛す、過去世にかゝる功德を汝に依て修したるにより、今又汝の上に於て福德を修せんと欲するなりと仰せられた。

* * * * * *

少しく事業が出來だすとか、或は名譽が上りでもすると、乍ち我れ程の者はないと云ふ氣になり、奴婢を使ひ、書生を養ひ、居然として大家氣取りに成り濟すのが人の常である。此等の人々は、世尊が盲目比丘の爲めに、自ら糸を繋ぎ給ひし故事に就て、深く反省せねばならぬことである。

大寺大坊の僧達は、尙更に此の一小話を等閑に現過ぐしてはならぬ

ことである。佛祖の冥祐の下に、衣食する身でありながら、佛祖の勤めを給へることを忘れ、人の事にも世の事にも少しも勤むると云ふことはなく、重い物とては箸と御經の外は、手にせぬと云ふような暮しをしておつては、實に世尊に對して申譯がないではないか。出るに車あり、入るに番僧小僧乃至妻子あつて、榮華三昧に一代を過ぐすは、以て凡俗の稱讃を博すべきも、斷じて世尊の冥鑑にかなひはせぬ。

兩眼を剜ることすらも厭ひ給はざりし大聖世尊の遺弟たる者、身を粉にし骨を碎きてなりとも、佛祖の爲めに勤めねばならぬことである。然るに小分の利他の事業に勤めざるのみか、一身の休戚に就て彼此れと小言を云ふとは、實に現罰を蒙らぬが一大不思議である。

嗚呼大樹は一旦にして生長は致さぬ、百年の霜雪を凌ぎて、始めて蓋天の枝葉を形造るものである。三祇百劫の勤苦の大行は、遂に大覺聖

者の世尊を生じたのである。我等は世尊の此の因緣說法を聞き、實に修養の足らざることを、たゞ〳〵慚愧するのみである。

六　鸚鵡の說法

昔、雪山に一羽の鸚鵡がおつて、盲目の父母を養ふておつた。

或時山麓の百姓が、畠地に種蒔をしながら發願して、今度蒔きつけた穀物は、一切衆生と共に食ふことゝしようわいと申した。鸚鵡は此の發願を聞いて、大變に歡び、爾來屢々其畠地へ參つて、穀物を啄み來つて、父母に供養しておつた。

其後百姓が畠地を見廻はつてみると、大變に鳥の爲めに暴らされておるので、昔の發願を忘れて了ひ、惡き鳥共の所作かな、己れ今に目に物見せてやらんと立腹し、早速に網を張つてまつておると、作ち一羽の鸚

鵡がかゝつた。

百姓は、此奴が俺の田地を暴らしやがつたにちがひないと呟きて、一撮みに殺そうとしかけると、鸚鵡の云ふようは、さて〳〵淺間敷いことをせらるゝものかな、貴方は其始め種蒔きの時分には、一切衆生と共々に食はんと發願せられたではないか、それゆへ自分は遠慮なしに穀物を啄んでおつたことであるに、今となつては網にかけて生捕るなんとは、餘りに無法な仕打ではないか、一体此の畠地は母のようなものので、種は父と同樣の役目である、畠地の母と種子の父の間に出來た子は、貴方の實言である。そして此等三人の者を保護すべき國王の役目を以ておらるゝが、貴方ではあるまいか、三人の者には虛言はないに、王の役目の貴方のみが昔の誓を忘れて了まわれるとは、何んとも淺間敷いことではないかと申した。

百姓は鸚鵡の條理の明かな御話をきゝて深く恥入た。それで鸚鵡に向ひ、お前はそうして誰を養ふのかと申すと。鸚鵡は、自分には盲目の兩親があつて、それを孝養する爲めに、日々苦勞しておると申したので、百姓は深く其志に感じ、爾來隨意に穀物を取去るがよいと申して放してやつたとのことである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

百姓の精神上の變化は、なか〳〵に注意せねばならぬことである。種蒔きの時分には、一切衆生に施そうと申したものゝさていそれが成熟していみると、段々慾がついて來て、遂には始めの發願を忘れて、是れを取去るものを恨むようになつて了ふたのである。而してかゝる精神上の變化は、私共の行爲の上にも屢々是れを認むることである。

金のない時分には、俺が金を持つておつたら、あゝもし、こうもするにと放言した者も、さて多少の金が手に入つてみると、なか〳〵初めの廣言の十分の一をも行はぬようになる。自分が局に當らば、あんなことをせぬと、他人の所置を非難した者も、局に當つてみると、種々の情實に纏綿せられて、昔の言草の半をも現實にすることが出來ぬようになる。人は空手の時は、氣樂氣儘な出放題を述ぶるがさて一分でも手に物を持つ身になると、ころりと變はつて了ふものである。

言ふは易いが、行ふことはむつかしい。私共は先づ行ふてから後に言ふことゝせねばならぬ。然らざれば屹度鸚鵡から一本遣込められるゝに相違ない。

七　紀念の靴

昔、十奢王に四人の夫人があつて、孰れの方にも一人づゝの王子がお

つた。第一夫人の王子を羅摩と云ひ、第二夫人の王子を羅曼と云ひ、第三夫人の王子を婆羅陀と云ひ、第四夫人の王子を滅怨惡と申した。

此四人の夫人の中で、王が最も寵愛せられたのは第三夫人であつた。王はさる時、乙夜の寢物語りに夫人に對して、朕が所有の財寶は都て汝に與ふるも、少しも惜は思はぬゆへ、汝若し所望があるならば、遠慮なく申すがよいと話されしに、夫人は數ならぬ妾をかくまで仰せくださることは、誠に難有き仕合と存じ奉りますも、只今はこれと云ふ所望もでざりませぬ、孰れそのうちにお願ひ申上ぐることもあらば、その節には是非共御聽計にあづかりたしとお答へ申上ぐと、王は快よく其趣を領承せられた。

其後幾程もなく王は大患に罹り給ひ、快復の程もおぼつかなかろふと云ふことゝなつた。それで早速第一皇子を拜して王位に昇らしめ、

いとおごそかに戴冠の式を擧げ給ふた。天下の萬衆は、孰れも新王の萬歳を三唱した。

胸に一物ある第三夫人は、此の有樣を打眺めては如何で默してすぐさるべきか、嫉妬のほむらは身を焚きつくさんばかりに燃へ立つた。それで一日王の病間を窺ふて、嬌舌巧みに、さる夜の王の情の辭を繰り返へし、是非共新王を廢して、一子婆羅陀に王位を讓られんことを哀願した。是れを聽かれたる十奢王は、氣も狂せんばかりに苦悶せられた。婆羅陀を王に昇さんとすれば新王を廢せざるべからず、さればとてさきに一旦夫人の願意を許したる點もあれば、無下に是を拒絶する譯にも參らず、進退維れ谷まられた。元來この十奢王は、年少の頃より未だ曾て信を違へられたといふことなく、尚ほ綸言汗の如く、又如何ともすることも能はざれば、遂に新王を廢することに決心せられ、さきに授けら

れたる寶冠を奪ひ取られた。

時に第二王子羅曼は、この有様を憤慨し、兄の王子に向ふて云はるゝには、大兄は無雙の勇者にて在すに、何故かゝる屈辱に甘じ給ふや、よろしく最後の決心をなし、父を惑はす妖妃を退治せらるべし。我れも亦た一臂の力を添へ申さんと。羅摩王子の申さるゝは、汝の注意もさることながら、然し父王の仰せに違ふて不孝の子となることは、自分の到底忍ぶ能はざる所である。それに第三夫人は、たとひ我が生母にあらざるも、父王の寵妃なれば、我れは我が生母と少しも異なる思は致さぬ。それに弟の婆羅陀は、極めて和順なる性質なれば、決して我々に對して異志を挾むが如きことはあるまい。尤も汝の申すごとく我れは大力あるも、どうしても父母と弟に對して刃向ふことは出來申さずと。羅曼王子も、兄の道理ある話を聞きて默して了はれた。

王は二人の兄弟を、遠く深山の奥へ流して、十二年の間國に歸ることなれと命せられた。兄弟の王子は、父王の勅に從ひ快よく配所へ赴かれた。

是れより先、第三王子の婆羅陀は外國へ遊學中であつたが、父王の大命を奉じたる急使が參つて、王位を讓らるゝとの事を申上げたので、直ちに歸朝せられた。そして始めて此度の出來事の一部始終を承知せられ、非常に憤慨せられたるも、其時は既に父王が崩御せられておつたものであるので、如何んともすることも出來ず、心ならずも王位を襲がれた。

かくて母に對して申さるゝは、母上の此度の仕打は、實に悖逆の所作であつて、全く我が一門を消滅せらるゝようのものである。自分は如何にしても心苦しくて堪へがたければ、是迄の如くに我が母上とし

てお仕へ申す譯には參らず、今後は我れを實の子として御覽下さらぬように願ひたしとて、それよりは己が母を拜せずして、第一の大夫人を孝養恭敬せられた。

新王婆羅陀は、日夕勵精して國政を處理せられたれば、朝廷の内も一際目立ちて能く治まりがついた。それで早速に軍隊に命じて出軍の用意を爲し、自ら是れに將として嚮きに遠流に處せられたる二兄の配所へ赴かれた。

二人の王子は、時ならぬに新王が大軍を引卒して來られたものであるで、不思議でならぬ。弟の羅曼は兄に向ふて、兄上は先きに婆羅陀は孝順なる性質なれば、我々に對しては決して異志を挾さまぬと仰せられしも、然しかく大軍を引卒して參つたからは、屹度我々を殺害しようとして來たのであろと申したれば、兄なる王子は、まさかに左樣なこと

もあるまゐ、是れには何か深い理由があるに違ひないと申して、落付き拂らつておられた。

さる程に軍隊は山の際まで進んで二兄の許へ參られた。第一王子の後方に控へしめて、獨り自ら進んで來た。新王は命を傳へて隊伍を羅摩は新王に對して、何故に斯くも多數の兵士を引卒して來りしやと詰問せらると。新王は對へて、小弟が兵士を引卒して參つたについては、定めし兄上に於かせられては異樣に感じ玉ふことならんと存ずるも、是れには別に仔細はあらず、たゞ途中にての賊難に備へたるまでのことなり、而して小弟が此度參上したるは、只今より兄上を迎へ歸りて、國政を統理して頂かんと欲してのことであると、赤心のある所を縷々と申し述べられた。

すると第一王子は、汝の申すこともさることながら、而も我々が此境

過にあるは、全く亡き父の仰せより出てたるものなれば、今にして汝の言葉に從ふて歸國せんか、直ちに違勅の罪を犯すと共に不孝の子となりおはるべし。我れは到底かゝる重罪を犯すに忍びずとて斷乎として新王の申出を拒絶せられた。

新王も、大兄の仰せは御尤もなるも、然し時と場合と申すこともあればとて、委曲に理を盡して申進められたるも、如何にしても第一王子が初志をひるがへされぬ爲め、今は是非に及ばずとて、責めては兄上の御紀念にもとて、第一王子の靴を讓り受けられ、涙と共に歸途に上られた。

歸城せらるゝなり直樣彼の紀念の靴を玉座に安置し、日夕是れに仕ふることゝ、さながらに眞の兄に仕ふるが如く、何事にまれ、先づこの紀念の靴に告げ奉らねば實行し給はなんだ。爾來、屢々使を山中に送つて、兄の歸城を懇請せられしも、いつの時も刑期が滿ぬからとて、すげなく

謝斷せられた。

歲月流駛し、やがて十有二年の歲霜も過ぎ去つた。王は非常に歎ばれて、叮嚀なる用意を爲して奉迎の使者を派遣せられたれば、山中の王子方も、新王の友愛の情の厚きに感じ、且つは十有二年の間、紀念の靴に仕へられたる物語には、得も云はれぬ感情を惹き起され、此度は快よく歸國せらるゝことゝなつた。

第一王子の歸來を迎へて、新王は直ちに王位を讓らんと懇願せられたれば、王子は、王は先王の命によつて位を襲がれしものなれば、自分は決して位につくべき者に非ずとて、固く辭退せられしも、弟の王は、正嫡の大兄を廢して、我れが王位に在るといふことは、斷じて不可なりと、いつかな聞き入れ給はず、果は泣きくづれられたれば、第一王子も、されば王の志に從はんとて、遂に王位に昇られた。王室の美德は國内に響き

波り、聽く者として其友情の厚きに感じ入らぬものとてはなかつた。

從つて風化大に行なはれ、人々悉く忠孝の德を全ふしたとのことである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

一年二年の短日月の間ならば、隨分親切も盡されることであるが、十有二年の長年月間に亘つて、少しもかはることなしと云ふことは、衰心よりの情愛がなくては、とても續くものではない。幼い間は、一つの物を半分に割いて分けようた間柄でも、年をとつて一家を構へると、さては水臭くなつて、他人の方が親切であると云ふようなことがまゝある。損益利害の問題は、遂に兄弟を他人の始めとせしむるようになる。世に慾程おそろしいものはない。私共は此邊のことに就ては、深く戒心せねばならぬことである。

大經に曰く『世間の人民父子兄弟、夫婦家室、中外の親屬、まさに相敬愛にして、あひ憎嫉することなく、有無あひ通じて、貪惜を得ることなかれ、言色つねに和して相違戻することなかれ。ある時は心に諍ひ恚怒する所あり、今世の恨みの意、微く相憎嫉すれば、後世には轉た劇しく大怨となるに至る』と。私共は、此の佛語を奉遵して、家庭の中に立つておつたならば、如何なる境遇の中に在つても、芽出度一族の和樂を保つことが出來るのである。

八　老父の門番

昔婆羅捺國に、父親が六十になると、一枚の敷物を與へて、家の門番にすると云ふ、沒人情の惡習風が行はれておつた。

時に、兄弟二人の子供を辛苦の中に育て上げた男があつたが、寄る年

浪のせきとめられずして、やがて六十の春を迎へた。そこで兄は弟に向ひ、老爺に敷物を與へて、今日から門番にせよと申付けた。弟は家の内を捜して一枚の敷物を見け出し是れを半截して半ばを老親に呈し、是れは兄よりの指圖でお差上げ申します、兄は父上に今日から門番をしていたゞきたいと申しております、と述べ苦しき胸をおさへて、やつとのことに言付け通りに致した。

すると兄は弟の所作を咎めて、何故に丸切り一枚を與へずして、半分しか出さぬのであるかと詰ると。弟は、一枚しかない物を丸切り父親に與へたら、後日必要の時に困難するからと申した。兄は不審の耳をそばだてて、何んの必要があるかと申すと。弟は妙なことを云はるゝものかな、他日兄さんに與へにやならぬことがあるからだ。何故に自分に與へにやならぬか、そんなことは申までもないこと、兄さんが年が

寄つたら、兄さんの子供が屹度門番にするだらふ、其時必要を感ずるではないか。

兄は弟の説明を聞いていたく驚嘆し、自分も一度は門番にならねばならぬかと、非常に落膽してためいきをつくと。弟は、知れたこと、誰が兄さんに代つて門番なんかするものかと申し、且つ懇々と父を門番にすることの不法非理なることを話したれば、兄は益々感動し、茲に兄弟の者は共々に宰相を訪ねて、此沒人情なる非法を改正せられんことを嘆願した。

宰相は、兄弟の申出を聞きて深く感嘆し、自分にも老人のあることとやで、是れは捨てゝおかれぬと思ひ、早速國王に言上して年來の惡法を禁止することゝした。爾來國中の老人は、老先き永く安穩に日送りすることが出來ることゝなつた。

人の事と聞くと、何にでも等閑に附し、自分の事と聞くと、針の穴程の事でも決して輕々に見過せぬと云ふことは、一般の人情である。不孝な兄も、弟よりやがては自己の身上に廻り來るべしとの痛言を聞き、茲に驚きを立てゝ、乍ち孝子の大道に立ち歸へつたのである。而して是れは決して昔物語として閑流することは出來ぬ。私共も日常深く萬事を我が身の上に引受けて、己の欲せざる所は、是れを人に施すこと勿れとの教訓を實行せねばならぬことである。

* * * * * *

九　阿難の聰明

大聖世尊が給孤獨園に在しゝ時、一日諸比丘衆が世尊に向ひ賢者阿難は何故にかくも聰明にして、一言の教誨も失忘することなきか、願くば其因縁を敎へ給はれたしと願ふたことがあつた。すると世尊は諸比丘に對し、次ぎの因縁談を物語られた。

昔、一比丘あつて、一沙彌を敎養しておつた。然るに此の比丘は、至つて嚴格な性であつて、日々課程を定めて沙彌に誦經せしめ、萬一その日課通りの誦經が出來ぬと、嚴誡を加へておつた。所が、沙彌の方では、日課の外に聚落に出でゝ分衛をなし、師匠と我身の衣食の料を求めねばならぬと云ふ、大仕事を控へておるので、時適にはそれが爲めに多くの時間を費して、誦經の閑の得られぬことがある。するとその度毎に師匠の小言を聞かねばならぬんだ。

或時も大變に叱かられて、シク〳〵泣きながら道を歩いておると。さる長者が聞咎めて、何をそう泣ておるかと尋ねて呉れたので、沙彌はありのまゝに、日頃の苦勞の程を物語つた。長者は沙彌の話を聞いて

氣の毒に思ひ、左樣なことならば、自分が是から悉皆衣食の料を供養してあげるで、そなたは氣兼なく勉強さるゝがよいと申して呉れた。沙彌は大變に歡び、早速驅け歸つて其由を師匠の比丘に物語ると。師匠も亦大歡びで、爾來師弟諸共に專心に修行の道をたどつたとのことである。

かく物語られたる世尊は、辭を改めて仰せらるゝようは、爾時、師なる比丘は定光佛にして、沙彌は我身也、而して二人を供養したる長者は、阿難の前身也。彼れは此の功德によりて、今亦聞持第一の德を得たるなりと。

＊　＊　＊　＊　＊

受持如來甚深法藏、護佛種性、常使不絕、興大悲、愍衆生とは、還相廻向の菩薩が道を守るの德を述べられたる大經の文であつて、阿難の行爲は

全く其德を示めしたるものである。佛法の護持は堂塔の中に在りはせぬ、金襴の法衣の上に在りはせぬ。たゞそれ斯教を受持する人物を作る上に在ると云ふことは、此の一小話にて悉されてある。

世に信者とか門徒とかと云ふて持囃されておる人々は、はたして能く是底の覺悟ありや否や。住持の堂班には金を出すが、新發意の教育費には小言を言ひはしまいか、格式の上下は氣にしても、其學德の有無には頓着せぬと云ふことはありはしまいか。末に泥んで本を忘れると云ふことは、世上一般の通弊であつて、我佛教上に在つても、著るしく此の弊害をみとむることである、深く猛慮しなければならぬことである。

一〇　餓鬼の教誨

或時、目蓮尊者が洹河の邊りを歩行しておると、遙か彼方より五百の餓鬼が遣つて來て、河の岸を下りて水を飲まんとした。すると洹河の水神が現れ出で、鐵杖を振上げて其一群を逐ひ拂ふて了ふた。水神の呵責を蒙りぼう〳〵の體で逃げ去つた餓鬼共は、やがて尊者の傍へ參つて、各々自分の過去の罪に就て、目蓮尊者の説明を請ふた。

それで群中の一鬼は、ツト尊者の前に進み出でゝ申すようは、自分は始終熱病の爲めに苦しめられて喉が渴いてなりませぬ。所が洹河の水は非常に清涼であると云ふことを仲間の者より聞きまして、早速驅け付けて參りましたが、どうしたことか、河の水は糞へくり返つておりました。爾かしともかくもと、一口飲みはしますと、何がさて、五臟六腑は燋け爛れて、其臭氣の甚しいことゝいつたら、我ながら堪へられぬ程でござる、是は抑も何等の罪に依て、現在かゝる業報を招くにやと。

尊者は、彼れに誨へらるゝようは、それは其方が、先世に人相見となつて人の吉凶禍福を占ひ、よい加減なことを申して世人を欺き、多くの人々に迷惑をかけたからであると。

次に一鬼が進み出でゝ申すには、自分は始終大きな恐ろしい狗に附纏はれて、五體の肉を噉み破られ、ほんの骨ばかりとなりますが、其中一度風が吹きますと、元の通りの五體となります。すると又狗が現はれまして、私の身體を噉み破つて了ひ、其苦しみたるや、實に堪へ難きことでござります、是は抑も何等の因縁によりましたものでござるかと。

尊者は彼れに誨へらるゝようは、其方は、先世は神主でおつて、始終世人に教へて羊を殺して、其血で天神を祭らしたから、今は其現罰を受けて、我身の肉を殺いで是れを贖なはねばならぬのであると。

次に進み出でたる一鬼の申すようは、自分は始終糞便にて五體を穢

され、其上それを食はぬと辛抱が出來ぬと云ふ苦勞を持つておる者でござりますが。何故にかゝる苦勞を受け申さねばならぬかと。

尊者は是を聞きて、それは其方は、先世に至極横着な婆羅門であつて、修行者が分衛して來る毎に、いつも糞便を鐵鉢の中へ盛つて是を苦しめたから、かゝる業報を受くるのであると誨へられた。

次に大鼎のような腹をかゝへて、而もその手足は糸のように痩せ細つて、喉といつたら、針の穴のような形をしておる餓鬼が進み出でゝ、自分はお見掛の通りの姿にて、ちつとも物を食ふことが出來ませぬが、これは又どうした譯でござるかと尋ねた。

尊者は、其方の先世はさる處の村長であつたが、其時は大酒を飲んで横着のみを云ひ、多くの人を苦しめたゆへ、左樣な苦しみを受くるのであると申された。

次ぎに進み出でたる餓鬼は、自分は厠へ參つて糞便を嚥はぬと、どうしても辛抱が出來ませぬが、爾るにそれを爲さうと致しますと、いつも大きな鬼が出て來て、自分を逐ひ拂ふてなりませぬと物語つた。

尊者は彼れに誨へて、それは其方は、先世の時寺男となつておつたことがあるが、其時分に信者の人々より飲食を供養して來ると、其方は、毎時も甘味い物を横取りして應供者の衆僧には麁惡なものゝみを差上げた報ひであると申し聞かされた。

次ぎに出でたる餓鬼の申すには、私は五體の中に、どこともなしに舌が出來ましてそれをば空中から斧が現はれ出でゝ切りさきますので、苦痛に堪へられませぬと。

尊者の云はるゝようは、其方の先世は、道人であつたが、或時衆僧の求めに應じて石密を細かに割いたことがある。其時其方は斧で以て密

を斫り、そうして、窃つと一片を盗み食いした。其現罰で今の苦勞を受くるのであると。

次ぎの一鬼の物語るようは、自分の身體には七枚の熱鐵丸があつて、始終口から腹に這入り、這入つては復た出て來り、五臓を燋爛し、其苦みたるや言語に絶へ申すと。

尊者は彼れに詢へて、其方は先世に、沙彌であつた時、人より送られし果苏子をば、衆僧方に平分せずして、自分の師匠のみに七枚多く與へて、偏頗な所作を爲した故であると、申された。

次ぎの餓鬼は、自分は二つの熱鐵丸が兩腋にクツイておつて、五體を燋爛し、苦しくてなりませぬと申した。

尊者は彼れに對し、その因縁を說明して申聞かさるようは、其方は先世に衆僧の爲めに餅を作つたことがある、その時窃つと二枚の餅を盗

んで兩腋に隱したことがあつた。其報ひが只今現はれ出でたのであると。

次ぎに顯はれ出でたる餓鬼は、大甕の樣な瘻を持つておつて、歩行く時は肩に上げ、座る時は其上に座し、難行のありだけを極めておつた。

尊者は彼れに詢へて、其方は先世に市役所の官吏を勤めておつたことがあるが、其時分下から物を取る時は、大斗と重秤を使ふたから、今は見掛けの通りの大きな瘻を負はされておるのであると、申された。

今度は奇體な餓鬼が出て來た。眼は兩肩につき、口と鼻とは胸に在つて、而も頭がない。

尊者は彼れの因縁を詢へらるゝようは、其方は先世に、胸手を勤め、多くの罪人を斬殺して得意がつておつたが爲め、左樣な淺間敷い姿を受けたのであると。

次ぎに出でたる餓鬼は、無數の熱針で、身體中を刺し苦しめられておつた。

尊者は彼れを一見して、其方は先世に調馬師若しくは調象師となつて、常に羽車で以て象馬の身體を若しめたゆへ、左樣な苦痛を受くるのであると申された。

次ぎに出でたる餓鬼は、自然の火焔に身をつゝまれて、悶惱しておつた。

尊者は彼れに對して仰せらるゝようは、其方は先世にさる國王の夫人であつたが、其時王の寵妃があつたのを、其方は嫉妬の思ひに驅られて、一夜密かに王の居られぬ折りを覗ふて、獨り臥つておる寵妃の腹へ熱湯の油をあびせかけて殺した爲め、今は其報ひの爲めに左樣なる苦惱を受くるのであると。

次ぎに現はれたる餓鬼の申すには、自分は始終旋風につゝまれて、いつも〳〵フワ〳〵として一處に止まることが出來ませぬが、是れは又どうした譯でござるかと。

尊者は答へて、其方は先世にト部であつたが、いつも〳〵妄語綺語をなして、他人の心を惑はして、落付かしめないだが爲めに、かゝる苦惱を受くるのであると。

次ぎの一鬼は、目も鼻もないさながらに一塊肉團の如き姿をなし、而も始終禽鳥小蟲の爲めに啄み喰はれて苦しんでおつた。

尊者は彼れの因緣を物語らるゝようは、其方は先世に他人に藥餌を與へて墮胎の罪を犯さしめたゆへ、今日かゝる醜體を受けて苦惱するのであると。

次ぎに現はれ出でたる餓鬼は、熱鐵の籠を蒙むつて苦しみ悶躁いで

おつた。

目蓮尊者は彼れの因縁を説かるゝようは、其方は先世に、常に網羅を以て鳥魚を捕ふることのみを仕事としておつた爲め、其樣なる苦惱を受くるのであると。

次ぎの餓鬼は、頭からかぶりものをして、少しも他人に顔を見られぬようにしておつたが、それでも尙ほ他人が見はしまいかと、常にビクビクして、少しも氣の休まる時がないと嘶つた。

尊者は彼れを敎誨して、其方は先世に、他人の婦に對して邪婬を行じ始終夫若しくは法官に發見せらるゝことはなきかと、常に心配しておつた爲め、其樣なる有樣となつたのであると申された。

最後の餓鬼は、肩の上に熱鐵を盛つたる酥瓶を乘せて、手に杓を持ち、自分でその熱鐵の湯を頭へふりかけて苦んでおつた。

尊者は彼れに向ひ其因縁を談じて、其方は先世に道人であつたが、或時一酥瓶をかくしまふておつたことがあつた。一日旅の道人が參つて、一杯の酥を請ふたことがあつたが、其方は深く隱して一滴も與へず、道人の立去つた後に是れを取出して、同僚の者と共に飲み干した。僧寶のものは一切に均分すべきであるに、其方はそれを致さゞりしが爲め、今日かゝる苦惱を受くるのであると申聞かされた。

一群の餓鬼共は、目蓮尊者の敎誨をきゝて、深く我身の罪禍を悔み泣く〳〵立去つて了ふた。

* * * * * * *

一群の餓鬼の本生譚は、何氣なしに讀過すると、馬鹿氣切つたる放談の如く思はるゝが、而も一度心を沈めて己れが日常の行爲に對照すると、或は是れ自己が他日の小照ではあるまいかと、思はれ、實に冷汗が流

れ出づることである。

諸法因縁生とは、世尊が常に諸弟子に對して說法せられたることであつて、宇宙の事物は、總じて此原則の下に支配せられておるものである。毫末の惡事も、分毛の善行も、一つとしてその結果を現はさずして消滅するものはない。從つて私共は、微細の行爲に對しても、必ずその責を負はねばならぬものであると云ふことは、忘れてはならぬことである。

鏡に向はざれば、容姿を端正にすることは出來ぬ。私共は此一篇の物語を我が姿見となして、日常罪惡の塵穢を拭ひ去ることを勉めねばならぬことである。

一一　亂打の三歸

昔、世尊が祇樹給孤獨園にいましゝ時、城中に惡奴と云ふ馬鹿者があつて、常に他人の財寶を偷みて、安樂な生活をしておつた。

時に世尊の弟子の中に一比丘があつて、始終塚間にて坐禪行道をなし、時分頃には城中へ來つて信者の供養を受けておつた。一日さる長者が、此比丘の威儀の正しきをながめ、深く隨喜の思を爲し、直ちに我家に入つて一張氈を取出し來り是れを供養した。

比丘は供養物をたづさへて塚間に歸へり來ると、惡奴が遣つて來て、それを與へよと迫つた。比丘は快よく是れを與へたるに、甘味を覺ゑたる惡奴は、次の日復遣て來て、比丘に向ひ氈を與へよと申したので、比丘は復快よく之れを與へた。第三日に惡奴は又推しかけて來て、今度は比丘の鉢をくれとねだつた。

此時比丘は倩ら思ふようは、此一鉢は我が乞食して命を維ぐもの、是

れなくては修行も出來がたし、それに彼の愚かなる惡奴は、飽くなきの求めを持つておるものなれば、幾等物を與へた所できりがつかぬ。よし一つ良法を考へて彼れに三自歸を授けて、再び我許に來らぬやうにしてやらんと。それで惡奴に對し、自分は少々疲れておるので、一寸休息した上で鉢をやるから、暫時待つておるがよいと申すと。惡奴は云はるゝまゝに一方に控へておつた。

其間に比丘は繩を取出し、羂索を作りて鉢の前に隱しおき。やがて惡奴に對し、自分は疲れて起るのが嫌やぢやで、貴樣自身で手を伸して取去れと申すと。惡奴は直ちに手を伸して鉢を攫むと、彼の時早く、比丘はシッカと繩を引いて彼れの手を縛り、是れを繩牀にくゝつて了ひ。同時に外に出でゝ杖を捉り來りしたゝかに打ちすへて、歸依佛と唱へ、惡奴を呵責して正道に歸へるべしと敎へたるに。彼れは容易に比丘

の辭に從はなんだ。比丘は再び、歸依法と唱へて痛打した。そうして又復說諭したるも、それでも得心をせぬ爲め、比丘はかさねて、歸依僧と唱へて、息の根も絕へんばかりに叩きすへた。

此時惡奴はック〳〵思ふようは、こいつはたまらぬはい、骨も肉も碎けて了ひそうぢや、此上に剛情張つて聞かなんだら、必定叩き殺されて了ふに相違ないと。それでとう〳〵比丘の辭に從ふて、惡事を止めることにした。

比丘は彼れの改心を認めて、繩を解いてやると。惡奴は直樣世尊の許へ驅け付けて、聲高々と、世尊は實に大慈悲のお方ぢや、比丘に勅して、我れに三歸を授けしめられた、その爲めやッとのことで命がつながつた、萬一世尊が四歸を授けられておつたら、それこそ自分は命を取られて了ふておるにと申した。

世尊は彼れの心が調伏したのを見給ひ、近く招いて說法して聞かされしに、心意開解し即座に須陀洹果を證つた。

＊　＊　＊　＊　＊

惡辣の手段は容易に行ふべきものではないが、而も道を傳へんと欲する者は、此活殺自在底の大覺悟を有しておらねばならぬことである。いつも〳〵株を守つて兎を俟つておつては、斷じて奏功せらるゝものでない。

賴むがどうの、すがるがこうのとの、文句の上にて安心を傳へんとする者は、此小話の主人公に就て一考せねばならぬことである。以心傳心の妙訣はたゞに禪僧の專買物のみではない、他力一流の者に執つてもたしかに此の呼吸が入る。されば、何事も方便なりとて、世俗に伍して濁流の浪をかぶつてはならぬことである。亂打の下にも、三歸依を唱へたる妙味は忘れてはならぬことである。今の世の豪傑腐の僧達は、此比丘の活說法に就て、深く聞かねばならぬことである。

一二　姦婦の現罰

昔、さる婆羅門の女房に、姿容艶美にして實に天女の再來であるかと思はるゝ程の評判の美人があつた。然るに此婦人は至つて多姪なる性質であつて、婦德を守ることがむつかしい。然し家には律義な姑があるので、思ひの儘の亂行をすることが出來ず、それゆへ何時も姑をば眼の上の瘤とし、何んとかして亡きものにせんと、世にも恐ろしい鬼心を起した。

姦智にたけたる婦人は、胸の一物を色にも顯はさず、表面は如何にも物やさしく、何に吳れとなく姑を大切になし、朝夕の奉養萬端、實に癢い

所へ手の屆く世話をいたした。

何がさて、心の中のたくみを知らぬ夫は、女房の仕向けを見て、お前の心盡しで、お母さんも、どんなに安樂であるかも知れぬ、俺も誠に安心しておると。心底より歡びを述べた。すると女房は、そんなに仰せられましては、恐れ入りまして、穴にも這入りたい樣な心持ちが致します。何分にもふつゝかな妾のする位では、とてもお母さんの御心に御滿足を與へることは出來ますまゐ。それに就ても思ひますのは、あの天上界へ生れますと、誠に結構至極な樂みが受けられますとやら、どうかお母さんも其處へお生れあそばされて、不足だらけの此の世の樂みに引換へて、快樂無極の御身の上とお成りあそばされましたら、どんなにか、お樂みなことでありましようと存じますと述立て、どうすればその上天とやらは出來ますかと、辭巧みに夫に說き立てた。

そこで夫は、上天の法は婆羅門敎では、五体を火中で燒きさへすればよいのであると申した。

兼ての企は今こそと、女房は、左樣なことでありますか、夫位なことで、上天が出來ますならば、一日も早くお生れあそばすようにしてお上げなされては如何でありますか、そうさへなされましたら、自然快樂の御身とお成りなされて、こんなに不都合だらけの仕向けをお受けなさらないで、お母さんのお爲めには、此上もない結構なことではありませぬかと申し添へた。

愚なる夫は、つい〳〵女房の辭に誑されて、老母を上天せしむることとした。それで早速野原に一大火坑を作り、山のように薪を盛り上げて火を附けた。焰々たる火光は紅蓮の舌を卷いて、天も焦さんばかりである。親戚故舊は火坑の周圍を取卷き、迎へられたる婆羅門の衆僧

は、口々に呪文を唱へ、皷樂絃歌で老母の上天の程を祝福した。やがて祭式も終り、集れる人々は散じ去つた。後には老母と夫婦のみが殘つた。それで夫婦の者は母を火坑の近くへ導き、有無を言せず其内へ衝き落し、後をも見ずに一目散に逃げて歸つた。

火坑の中へ投げ込まれたる老母は、乍ち燒け死ぬかと思ひしに、幸にも坑の中に火の廻らぬ所があつて其處へ落ちた爲め、怪我もしなかつた。命は誰とて惜いものなれば、再び坑の外へ這ふて出た。それで家路を指して歸ろうとしたが、夜は常闇であつた爲め、路に迷ふて叢林の中へ這入り、どうしても本道へ出ることが出來ぬ。虎狼羅刹の災難に罹つてはならじと、とある大樹の上に登つて一夜を過ぐさんとした。

其夜、群賊あつて偷み取つたる多くの財寶を大樹の下に運び來つて一休みした。老母は震ひ怖れて息を殺して窺ふておつたが、不圖したはづみに咳ばらひをした。群賊共は人氣もない森林中に咳ばらひの聲を聞いた爲め驚いたも驚いたも、そら化物が居るぞ、油斷すなと偷み取つたる財寶をあたりに投げ出して、我れ一と逃げ去つて了ふた。

そのうち東が白らんで來たので、老母もヤットのことに蘇生の思ひをなし、樹上より下り來り、前夜群賊が打捨ておいた財寶の中より、香瓔珠璣金釧珥瑞、さては珍奇の雜物を撰び取つて一包となし、是れを背負ふて家に歸つた。

夫婦の者は死んだと思ふた老母が歸へつて來たゆへ、驚くまいことか、定めし幽靈が恨みを晴らしに來たものと思ひ、震ひ上つて寄りつかなんだ。すると老母は、自分はそち達のお蔭で幸に上天し、多分の財寶を獲たことである。マア、是れを見るがよいとて、背の包を下し、打ち開き、嫁に向ひ、この香瓔珠璣金釧珥瑞は、皆是れそなたの父母を始め、姑

姉妹の方々より、そなたへ與へて呉れとて授けられたものであるが、自分は年が寄つて重荷を背負ふことが出來ぬ爲め、ほんのこれしきの物より運んで來られなかつたのである。そなたが此上に欲しいと思ふならば、早速に上天して勝手に運び去るがよいとの傳言であると申した。

此話を聞きたる女房は、非常に歡んで夫に對して、お母さんは年が寄られて力が弱い爲め、多分の財寶をお運びなさることが出來なんだで、是より妾が上天して思ふ存分運んで參りますから、どうかお母さんの時の如く、火の坑へ入れて頂きたいと願ふた。欲の深い夫は、女房の辭に贊成し、直ちに式の如く火坑を設けて、可愛い女房を投げ込んだるに、どうしたことであつたか、今度は萬劫末代寶を背負ふて歸へつて來なんだ。

＊　＊　＊　＊　＊

恩田を荒らしておいて善い苗の育つはづはない。見よ、此姦婦が現罰立所に至つて、徒らに燒死して了ふた有樣を。火坑を作つて母を葬ろうと企てるような惡徒は、天下に比類少いが、然し心の中に火坑を作つて、母の燒死を俟つておる者はありはしまいか、是實に靜思しなければならぬことである。世尊が此一話を物語られたのは、恐くは此邊のことに對して、注意を喚起せしめんが爲めの、老婆親切であろうと伺はれる。

嫁を貰はぬ前は孝行息子であつた者が、嫁が來てから、打つて變つて不孝者となるためしは、天下にまいあることである。婦人の辭は優いようであるが、而もなか〳〵剛い所がある。大盤石があまだれの爲めに穴を穿たると同じく、いつともなしに男の心を溶らかして了ふもの

である。我等は是れを聞くに當つて、深く注意を要することである。本末を誤る勿れ、妻が大事か、親が大事か、是れさへ忘れなかつたら、斷じて不孝の罪に陷ることはない。況んや孝養父母は、三福の一つなるの佛の教を聞くものは、假令百難を排しても、父母を安んせしめねばならぬことである。

小話は不孝の天罰を教ゆると共に、又一面には人生生存の妙趣を教へられておる。今の世、自分さへ都合よければ、人はどうでもかまはぬと云ふ有様であつて、自分の目的を達する爲めには、他人を火坑に陷入れても何んとも思はぬと云ふ、横着根性が横行しておるのである。然れども世は決して自分一人にて渡れるものでない、自他互に救護して、始めて人生の眞意が發揮せらるゝことである。されば他人を倒した時は、やがて我身が倒れる基ひを致しておるのである。天道は決し

て片手落しの遍頗な處置をするものではない。私共は此一小話を讀むに當つて、益々佛の『世間人民、父子兄弟、夫婦室家、中外親屬、當相敬愛、無相憎嫉、有無相通、無得貪惜、言色常和、莫相違戾』の訓言の切實なることを感ずるのである。

一三　二人の内官

波斯匿王が或夜内殿で臥せつて居らるゝと、次ぎの間で二人の内官が諍論を始めた。一人の云ふには、我が身の今日あるは、全く王の賜であつて、大王の恩寵を蒙らなかつたなら、決してこうして居る譯にはいかぬのであると。他の一人の云ふには、自分はそうは思はぬ、我が身の今日あるは、別に大王の力によるのではない、全く自らの業力の然らしむる所と信じて居ると申した。

王は知らぬ振りして此諍論を聞かれ、心の中に王のお蔭を蒙つて居ると云ふ内官の言葉を尤と思はれ、何にか此の者に褒美を與へんと思召され、早速當直の人を招いて、王妃の處へ遣はし、勅を傳へて、やがて此方より使の者をやるから、どうか其者に金錢衣服瓔珞を與へて呉れる樣にと申遣はされた。

かくてさきの王の力で活きて居ると云ふた内官に、王の飲み餘りの酒を持たせて、王妃の所へ遣はされた。

此時、彼の内官は、酒をもつて往かんとして門口に出ると、遽に鼻血が出て行くことが出來ぬやうになつた。所が折好く、自分の業力によつて活きておると云ふた内官がやつて來たから、このものに代つて貰らふた。

王妃は此使者に對し、勅命の如く、金錢衣服瓔珞を下賜せられた。内官は還りて事の由を王に申し上ると、王は非常に怪まれた。

早速先の内官を招んで、われ汝を遣はしたるに、何故に行かざりしかと尋ねらるゝと、答へて申すには、私は行かんと致したるに、門口を出ると鼻血が出で、とても往けませなんだ、所が幸ひにあの人に出會ひましたから、代りて行つてもらいましたのであると。

此の答を聞き、王はつくづくと溜息をつかれて、佛語の眞實なることを今更の如く感せられ、人の爲すことは、各自の業力によるもので、決して人より與ふることも出來ねば、又奪ふことも出來ぬものであるといはれたとのことである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此遺訓を讀むものは、如何に因果の誤りなきことを、さては前業の免るべからざることを知ることが出來るであろう。王が自分の氣に入り

の内官に財寶を與へんとせられたるにもかゝはらず、それが反つて反對の者の手に入ることゝなつたではないか。實に因果の理法は王の言の如く、人事を以て動かすべからざるものである。我等も亦此の世に生を受けておる以上は、苦みにもせよ、樂みにもせよ、決して偶然に出來るものではない、全く自己の業力の所感である。してみると、何にもそう泣たり笑ふたりするにも及ばぬ、唯深く因果の大法を信じ、未來の善果を得るように心懸けねばならぬ。

思ふに依報は正報に供ふものであつて、正報を離れて別に依報の存在を許さぬものである、從つて私共は、依報の事に就て氣を勞することはいらぬ、唯正報の一點を圓滿にすることを注意さへすればよいのである。正報の本源は自己の心中にあり、己心を離れて正報の源泉はない、されば自淨其意の一事こそは、私共の萬福の本源である。

大經に曰く『身を端し行を正くします〳〵諸善を作して己を修め、體を潔くし、心垢を洗除し言行忠信に表裏相應すべし。人能みづから度し轉あひ拯濟して、精明に求願し善本を積累せよ』と。吾人の勤むべき大道は明白々に顯示せられておるのである。

一四　延命の神術

昔、さる羅漢が一人の沙彌を教育しておつたが、或時羅漢が入定して、沙彌の將來を觀察してみると、七日經つて命終せねばならぬと云ふことがわかつた。羅漢は不便のものと思ひ、責めては命のある中に親許へかへらしてやろふと考へ、それとなしに用事に事託けて、七日經つてから歸へつて來いと申して暇を與へた。

沙彌は師匠の許を得たので、イソ〳〵として親許へ歸へつたが、途中

にて多くの蟻が水に漂はされて大迷惑をしておるのをながめ、これは可愛想であるわいと思ひ、早速袈裟をはづして水を堰いて命を助けてやつた。そうして家に歸つて用事を濟まし、七日目に師匠の許へ歸へつて來た。

羅漢は、沙彌が達者で歸へつたのをみて、不審が晴れず、再び入定して長命の因縁を觀察してみると。是れと云ふ福德はちつともないが、只多くの蟻の災難を救ふたが爲め、かくも命を延すことが出來たのであると云ふことが解せられた。

＊　＊　＊　＊　＊

道眼の開けない自分共では、何事も目前見る事より解することが出來ぬが、而も一度天眼自在を得たならば、一切の行爲の因果は、必ず歴然として我が眼底に映ずるに相違なかろうと思はる。若しそれが出來

たら、どんなに横着なものでも、必ず自己の行爲を謹しむに相違ない。

蟻子の命を救ふたが爲め、自己の生命を延ばしたと云ふことは、私共に對し大なる教訓を垂れておる、誠に生命の延長は、他の生命を延長せしむよりの來るものである。されば徒らに殺生罪を犯す者は、自ら己れの生命を殺ぎ去つておるものである、深く誡慎せねばならぬことである。

我等不德にして、彼の羅漢の如き道眼を有してをらぬのであるが、而も遺教明かに現存して、道を誨ゆること懇切である、されば謹んで此の教を聞きて、勉めて善道に向はねばならぬことである。

一五　天魔の難詰

過去久遠の昔に、棄老國と云ふ國があつた。その國には老人をば、遠

方へ棄てゝ了ふと云ふ法律が布かれておつた。

時に、一大臣の父が、追々と年を取つたので、國の法律の指定するが如く、近き中に棄てねばならぬことゝなつた。然るに大臣は至つて孝順な性質であつたので、如何にしても我が老父を棄て去るには忍びぬ。それで違法の處置とは思ひながらも、窃かに我邸宅の内に穴藏を造つて、父を、其内に移し、人目を忍んで朝夕の孝養を勉めておつた。

然るに或時、天魔が國王の殿中に現はれ、二匹の蛇を差出して云ふようは、此の蛇の内にて孰れが雄であるか、又雌であるかを區別すべし、若し能く是れが判斷を正確に致したならば、我は汝の國を守護すべし。然れども萬一是が判斷を誤る時は、向ふ七日間の内に、汝の國を覆滅すべしと威嚇した。

王は是れを聞て非常に懊惱せられ、直ちに群臣を集めて斯事を凝議せられたが、誰とて能く是を判斷する者がない。それで王は國中に令し、能く是れを解する者には、厚く賞爵を與へんと申された。

さきの大臣は、家に歸へつて其由を父に物語ると。父は答へて、それは容易なことである。何になりと細軟な物を敷いて、その上に蛇をのせたら、雄の方は屹度躁擾し、雌の方は靜かにして動かぬと申した。大臣は直ちに參内して、是れを試みたるに、果して其辭の如くであつて、雌雄を區別することが出來た。

然るに天魔は、復第二難を出して申すには、世の中には、覺めて居つて睡る者があり、又睡つておりながら、而も覺めておる者があるが、それは如何なる種類の人であるかと申した。

此の難問に對しても、誰一人として答へる者がなかつた。大臣は復是れを父に尋ねたるに、父の云ふには、それは學人のことを申たのであ

つて、凡夫は肉眼を開いて五欲の物を求むるも、而も心の智眼は暗ふして睡れるも同一である。反之て、羅漢は五欲のものに眼を呉れずして睡れるが如きであるも、無漏の佛果に對しては明かに智眼を開いて寸時も睡りはせぬ。思ふに天魔は此事を以て問難したのであろうと。

大臣は父の辭を以て答へたるに、天魔はそれでよいと申した。

第一難第二難は、無難に答辯したるに、天魔は續いて第三難を試み、王の廐の大白象を指し、彼の大象の體重は、幾斤兩であるかと申した。大臣は復是れを父に尋ねたるに、父は敎へて、それは大象を船に乘せて大池の中へ浮べ、船の沈める時、船舷の水際に目じるしを附けておき、然る後象のかわりに石を積み込み、さきの目じるしの處まで船を沈めよ、かくて後にその石の斤兩を量らば、象の體重は容易に知ることが出來るべしと申した。大臣は直ちに父が敎ゆる所を以て答へたるに、天魔も

然るべしとうなづいた。

天魔は更ちに第四難を出し、一掬の水にて能く大海の水よりも多量なることがあるが、是れは如何なる場合にあるかと試みた。

天魔の難問は、愈出でゝ愈々むつかしい。大臣は復是れを父に尋ぬると、父は是れを解して曰く、されば、若し人あつて能く信心清淨にして、一掬の水を以て佛及び僧に供養し、或は父母若しくは困厄の病人に與ふることあらば、此功德は必ず報ひ來つて、數千萬劫、福を受くると無窮なるべし、彼の海水は如何に多量なりとも、一劫の間より保つて能はず、かゝれば今信心の一掬水は、大海の水よりも百千萬億倍も多量なるに非らずやと。大臣は直ちに此辭を以て天魔に答へた。

すると天魔は難詰の方法をかへて、乍ち身を四支骨立の餓人と變じ、世に又我に勝る餓窮痩苦の者ありや否やと尋ねた。

答は同じく大臣の父を煩はした。老人曰く、若し人慳貪嫉妬にして三寶を信んせず、父母及び師長を供養せざるときは、死して後餓鬼の中に墮し、百千萬劫の間、水穀の名すらも聞くこと能はず、身は大山の如く、腹は大谷の如く、而もその咽は細針の如く、頭髪は錐刀の如くするぞくしておのが全身に纏綿し、起居動作の際に當つて身體を刺傷するが爲め、支節悉く火にて燃るが如き劇苦を受く、此の苦しみたるや、彼れ魔神の示めす所の餓人に勝ること、千萬億倍なるべしと。

此の痛快なる解答に對しては、天魔も一言の答を致すことが出來なかつた。それゆへ彼れは直ちに身を變じて、前よりも一層淺間敷き姿を示した。手足は桎械にていましめられ、頸も亦鎖を以て縛せられて、尚ほ全身悉く火傷の爲めに燋爛ておる。聲を擧げて曰く、世に我れに勝れる劇苦を受るものありや否やと。

舉朝の臣僚、一人として彼れに勝れる劇苦者を擧ぐることが出來ぬ、皆悉く慴伏した。大臣はすぐさま家に歸へつて其由を父に談じたるに、父の云ふようは、若し人あつて父母を孝養せず、師長を逆害し、夫主に叛き、三寶を誹謗するあらんか、將來の世には必ず地獄に墮し、刀山劍樹、火車爐炭陷河沸屎等に責められ、その苦しみたるや、無量無邊不可計數なるべし。此の如きの劇苦は、到底彼れ魔神の苦惱の比に非らざるべしと。

大臣は、父の語れるまゝを述べて、天魔に答へたるに、天魔は乍ち身を端正瑰瑋の美人に變じ、世には我れに勝れる端正なる女人ありやと尋ねた。固より是れに答ふべき聰明の者もなければ、大臣は同じく老父の明答を請ふた。

老人云ふ。若し人あつて三寶を信敬し、父母に孝順にして、而も布施

を好み、忍辱精進にて戒を持つことあらば、やがては天上界に生れて、端正殊特なること、彼の魔神に勝れること百千萬倍にして、彼れが如きは、恰も瞎獼猴と同じと云へと敎へた。

大臣は父が敎のまゝを述べて、大に天魔を罵倒した。天魔は默して答ふる處がなかつた。

天魔の難詰も、此上は無かるべしと思ひしに、變幻極まりなき彼れ魔神は、容易に其手を收めず、又復難問題を提出した。彼れは眞四角の一個の檀木を出し、その孰れが枝葉に向へる上部にして、孰れが根底に當れる下部なるやを說明すべしと問難した。

大臣の父は、それしきのことは易き尋ねなり。彼の檀木を水中に投ずれば、根元の方は必ず沈むべしと申した。されば此の難問も亦た國王を屈伏せしむることが出來なんだ。

最後に彼れは二匹の純白の馬を現はし、その母子を區別せよと申した。

老人の解答は、益々出でゝ益々妙である。區別は易すし、若し夫れ草を與へて食せしむれば、母は必ず子に讓つて、先づ是れを食せしむるに相違ないとのことである。大臣は父の敎へし如く行ひたるに、果して母子を區別することが出來た。

天魔の難詰に對する國王の解答は、孰れも其要を得たるが爲め、彼れは非常に感嘆し、種々の珍琦寶財を國王に贈り、且つ云ふようは、我れ今後汝の邦家を擁護し、必ず外敵をして汝の國家を侵害せしむることなかるべしと。

王は此辭を聞きて大に踊悅せられ、さきの大臣に尋ねらるゝようは、抑もかゝる解答は、汝自ら發明せしか、或は又人あつて汝に敎へたるも

のなるや、孰にしても汝の才智に依つて、我が國家は平安を獲たるのみならず、斯くも多くの珍寶を得、又復魔神の擁護を蒙むることゝなつた、是れ皆汝の力であると。心底より感謝の意を表せられた。

時に大臣は答へて申すようは、是れ全く臣の智より出でしにはあらず、大王願くば許し給へ、臣今その所以を開陳すべしと。王の申さるようは、假令ひ汝に萬死の罪ありとも、我は快よく是れを許すべし、況んや他の小罪をや、汝決して憚るなく、その所思を述ぶべしと。

大臣の申すようは、國に制令あつて老人を養ふことを許さゞるも、臣は臣の父の老ひたる者を棄るに忍びず、國家の大禁を犯して窃かに父を穴藏の中にかくまひて朝夕是れに奉養せり、而してさきの解答は、全く是れ臣の老父が臣に敎へて國難を靖んせしめたるものなりと、一部始終を打明した。

王は孝臣の物語を聞いていたく歎美せられ、直ちに令を宣して、天下の者に老人を棄つることを嚴禁し、且若し父母に不孝をなし、尊長を敬せざるものあらば、大罪を加ふべしと嚴達せられた。

世尊のたまはく。爾時、父は我にして、臣は舍利弗、王は阿闍世なり、而して阿難は其時の天神なりと。

* * * * * *

經驗は生きた良師である。多年幾多の世の荒波を蹈破したる者は、必ずそれ相應の經驗を得ておる者である、私共は己を空くして此良師に就て生きたる敎訓を聞かねばならぬことである。彼の孝養に篤き大臣は是れを聞いたが爲めに、國家の大難を救濟することが出來たのである。今の世の青年、ともすると、何んの老人輩が知るものかと、一概に年寄を排斥する嫌ひがあるが、是れは實に誤れるの甚しきものと申

さねばならぬことである。

今日昌平の世には、老人を棄つると云ふが如きことはまさかにありはせぬが、而も形骸の老人は棄てぬとしても、精神の老人を棄てゝおることはありはしまいか。

是れに衣食せしめ、是れに安逸ならしめたりとて、それで老親に對する責任は盡せたとは申すことは出來ぬ。孝子はその父母の心を安んせしめねばならぬ、孝子はその父母の命のまゝに是を遵奉しなければならぬことである。若夫れ父母の心を安んせしめず、父母の命に反して敢て是れを顧みずと云ふが如きことがあると、明かに其父母を棄てたるものであつて天下の大逆是れに過ぎたるものはない。戒めずんばあるべからず。思ふに世尊が此の話を遊ばされたる眞意は、恐くは此邊の注意を與へんが爲めではあるまいか。

一六　七日の大王

大聖世尊が舍衛國の祇樹給孤獨園に在しゝ時、阿闍世王と波斯匿王との間に平和が亂れ、兩王共に大に四部の兵を集め、勝敗を一擧に決することゝなつた。

時に波斯匿王は戰運拙なく、三度戰ふて三度ながら阿闍世王の爲めに打破られ、殊に最後の役には、慘々の目に遇ひ、漸く身を以て免れて城中に歸つて來た。時の運とは申しながら、王は心悔でならぬ。どうして今日の恥辱を雪がんかと、寢食を忘れて懊惱せられた。

爾時、王の城内に一人の大福長者があつて、王の愁ひ惱まるゝ由をきゝ、一日、大王に謁見して申すには、自分は誠に德も學もなき賤き者なるも、幸に家には多くの金銀珍寶を貯へおることなれば、大王よろしく是

れを以て象馬を求め、且つ重賞をかけて健兒を募り、以て再び敵王を攻撃せらるべし。さすれば必ず勝利を得給ふならん。何にもそう憂愁あそばすには及ばぬではないかと。

王は、長者の忠誠を嘉納せられ、云ふがまゝに彼れの財寶を用ゐ、使を四方に出して、健兒を募集せられた。所が、募りに應じて一人の豪傑が參つた。王の將軍は、新參の豪傑と共に大に兵法を講究し、先づ先陣に豪傑を立たしめ、次ぎに一般兵士を列し、最後に劣者を集めて後陣を固めしめ、充分に戰鬪準備をとゝなへ、やがて敵軍に向ふて火蓋を切つたるに、此度は非常な勝利で、多くの戰利品を獲られたのみならず、總大將の阿闍世王をば捕虜とした。

波斯匿王は大歡喜し、早速敵王と共に、羽蓋車に同乘して、祇樹給孤獨園に世尊を訪ね、戰鬪の經過を物語り、且つ申さるゝは、自分は阿闍世

王に對し、嘗て毛頭の怨みもいだきたることなきに、彼れは何故か、始終自分に對して、怨讎の思ひをなして止まず、遂に此度の如き戰鬪を開くに至つたことである。然れども阿闍世王の先王は、自分と無二の親交を結んでおつたことなれば、如何にしても彼れを殺すに忍びざれば、是れより彼れを本國に放還せしめんと存ず、此事につき世尊の御賢慮は如何んと尋ねられた。

世尊は、王の物語を聞かれて非常に其志の殊勝なることを讃嘆し、親と非親とを平等にながめ、心常に平等なることは、誠に賢聖の讃する所なりとて、王の爲めに次ぎの偈を說かれた。

負則生憂懼、勝則懷欣慶、汝今放彼王、
二俱生歡喜、若能息勝負、最妙第一樂。

波斯匿王は世尊の偈を聽かれ、如何にも然ることゝ思ひ、初志の如く

阿闍世王を放還し、自分も亦宮城へ還御した。

かくて倩ら思はるゝようは、此度の勝利は、全く長者の力に依るものなれば、彼れに對して充分の恩賞を與へねばなるまいと。それで早速長者を招きてその旨を傳へらるゝと。長者は、大王のお辭に從ひ申すは、誠に腹黑き所作とは存じ申すも、臣に一事の心願あるにより、大王幸に是れを許し給へと申上げた。

王は、何事にても汝の願ひとあらば聽屆くることなれば、遠慮なく申述るがよいと仰せられた。

長者は、早速に御開屆を賜はり、誠に身に餘る光榮と感佩致しました。就ては大王、願くば臣に許すに、七日間舍衞國の王となることを以てせられたしと言上した。

王は快よく長者の願を許され、直ちに鼓を擊つて其旨を國内に布告せられた。

七日大王は、王位に昇つて命令を臣下に傳へると、孰れも命の儘に行はるゝにより、卽ち使を小王の許に遣はし、悉く來朝を命じ、嚴命を以て三寶に歸依せしめ、且つ佛を請じて大供養を申上げた。

かくて七日大王は、五體を地に投じて、大誓願を發して申すようは、願くば此の七日間、王となつて行へる功德を以て、未來世に於て、盲冥の衆生の爲めには眼目となり、歸依なき者には歸依わらしめ、救護なき者には救護者となり、安穩なき者には安穩となり、解脫なき者には解脫をなさしめ、未涅槃の者には涅槃を得せしめんと。

世尊は、長者の發願を聞かれて、便ち微笑し給ひしに、隨從の阿難は、何故に、しかく微笑し給ふかと尋ね申上げしに、世尊は答へて、彼れは三阿僧祇劫を過ぎて成佛し、其名を最勝と申し、衆生を濟度すること限量な

からん故に我はかく微笑したるなりと仰せられた。

＊　＊　＊　＊　＊

若し能く勝負を息めば、最妙第一ならんとは、實に難有い教訓である。

俺れが〳〵と他を排して、己れの頭を擧げんとあせるが故に、他亦何んの己れだつて劣るべきかと反抗し來り、茲に淺間敷修羅の種を蒔きつけるのである。自分の方に排他の觀念がなかつたならば、他は決して怨恨を懷くものではない。恐るべきは、實に排他の觀念である。

獅子は恐るべき猛獸であるが、而も人間の方より手出しをせぬ限りは、決して飛付いて來るものではないとは、實地に當つた旅人の物語る所である、猛獸既に然り、況んや人においておや。世に相手にならぬと云ふ程の強い者はない。如來の大願海中に歸入するものは、他に對して相手にならぬのみならず、胸裡の煩惱にも頓着なく、ひたすらに大悲

の光明中に安住すべきである。

狹き小路も相讓る時は氣樂に通行が出來る、廣き大道も他を顧みずして横行する時は、屹度衝き當る。衝突排他の源因は、道に非ずして、人に存するものである。

廣き天空には無數の星辰がかゝるも、而も孰れもその規道を廻つて、少しも衝突を致しはせない。深山の奥に森々たる樹木も、大樹小木、孰れも其處を得て、自然に生育繁茂しておることである。天地の大則には、衝突と排他の跡はない、雨も風も、月も日も、互に和順して、萬物を覆育しておるのである。唯夫れ人間のみは、小なる我見を振り舞はして、徒らに爭亂を事とするのである。誠に淺間敷且つ恥づべきの至りである。

一七　無言の説法

昔、さる聰明な婦人があつて、深く三寶を仰信し、始終衆僧を迎へて供養の誠を致しておつた。

或時一人の老比丘が、順番に當つて婦人の供養に請待せられたが、此老比丘は年の加減で根機も純り、其上愚純の性質であつた爲め、一句の法門も解しておらなかつた。それとは知らず婦人は、いつもの通り叮嚀なる供養の齋を差し上げ、比丘の食し訖るをまつて、どうか一言の御化導を蒙りたしと懇願し、自分は室の一隅に目を閉ぢて靜座し、謹で聞法せんと致した。

然るに老比丘は、とても婦人の爲めに説法すると云ふ資格がないことを能く承知しておる爲め、如何して此の難關を切抜けんかと冷汗を

流しておつた。それでそつと相手の婦人を觀めてみると、目を閉ぢ默座しておるゆへ、老比丘はこいつは占めた、相手の睡つておる間に逃げ歸つてやらうと思ひ、音を立てず靜つと隨德寺をきめこんで了ふた。

婦人の方では、靜座と共に、至心に、有爲之法は無常苦空にして自在を得ず、と云ふことを觀じかけ、次第に深心觀察の奥妙に入つた爲め、遂に初果を發得した。

開悟と共に目を開いてみると、老比丘の姿がみへぬ、是れは又不思議なりと驚いたが、爾し此の度の道果を獲得したのは、全く老比丘の恩惠なりと歡び、早速に比丘の許を訪ねて事の次第を物語らんとしたるに、老比丘は、自分の無智を自覺しておる爲め、どうして〳〵婦人に面會することが出來ようぞ、婦人が來たと云ふことを聞くと共に、深く隱れて一寸とも出て來ぬ、婦人の方では、是非面晤したいと訪ね廻つたが、比丘

は益々避け隠れて了ふた。然し婦人もさる者、どうしても面會せねばおかぬと、シッコク索ね廻つた爲め、老比丘も致し方なく遂に會見した。

婦人は初果を發得したる一部始終を物語つて、是れ全く大德の賜なりと感謝し、大層なる供養物を齎らして大恩を報謝した。老比丘は此の出來事の爲めに深く慚愧し、爾來一倍に勉責して道を修めたるに、幾程もなく芽出度三昧發得して、大羅漢果を證悟した。

* * * * * *

悟道の樞機は、此一話の中に遺憾なく發揮せられておることである。心絃の妙音は手を下して奏る者を俟つて始めて鳴るものである。彼の文句と談義の如きは、確かに死物であつて、至心求道の助けなくして、決して其効を奏するものでない。

吾人は月を指す指頭に執着していはならぬ、須らく月の實體を達觀せねばならぬことである。文字を離れ人師を離れ、此身如何、此心如何と、内觀反省の誠を盡すことあらんか、茲に始めて如來の大法の上に一隻眼を開くことを得べし。今此老比丘と婦人の悟道とは、明かに其事實を證明しておるではないか。

一八　怪魚の問答

昔、世尊が諸比丘と共に遊行して、梨越河のほとりに赴かるゝと、爾時五百の牧牛人と、五百の漁師があつて、各々其業を勤めておつた。世尊は河の岸にて休息せられたが、其中に漁師の方では、大漁があつたと見へ、五百人が總掛りで網を曳いたが、それでもなか〳〵曳上げることが出來なんだので、五百の牧牛人を雇ひ來り、千人掛りで、どうどう岸へ曳上げた。それで早速網の中を驗べてみると、驚くべき一大怪魚がかゝ

つておつた。

全身は魚の形であるが、頭の數は百に上り、それも、驢馬や、駱駝や、虎や、狼や、猪や、狗や、さては猿猴に、狐に、狸と云ふ有樣で、寄怪極まる姿であつた。漁師を始め、牧牛の男共は、是れは不思議な魚だと、孰れも大騒ぎをした。

是時世尊は、遙かにその有樣を眺められ、阿難を招いて、何事なるかを見て來いと仰せられた。阿難は早速駆け附けて實地を見て參り、不思議な大魚を生捕つたることを復命すると、世尊は直ちに諸比丘を從へて其場所へ赴かれ、魚に向ふて、汝は迦毗梨ではないかと尋ねらるゝと、魚は答へて、左樣でござると申した。世尊は重ねて、汝は實に迦毗梨なるかと仰せらるゝと、魚は再び如何にも左樣でござると申した。かくて鄭重に三度迄尋ねられしに、三度共に同一の答をなした。すると

世尊は、汝は是迄で何處におつたかと申さるゝと、魚は阿鼻地獄の中に墮在して、苦惱の淵に沈んでおつたと答へた。

大衆は此問答を聞いて不審が晴れぬ。それで阿難は、世尊の前に進みて、世尊は何故に此怪魚を迦毗梨とお呼びなされて、かゝる問答をあそばすや、願くば其因縁を承りたしと申した。すると世尊は、諸比丘の爲めに次ぎの物語をあそばされた。

昔、迦葉佛在世の時に、さる婆羅門の子に迦毗梨と云ふ者があつて、天性聰明博達にして、一族の中にて多聞第一であつた。爾し、迦葉佛の諸弟子方に及ぶことが出來なんだ。それで父なる婆羅門は、臨終の夕に、迦毗梨を枕元に呼寄せて申し聞すようは、我が歿後、汝は慎んで迦葉佛及び諸沙門と論議演說することなかれ、彼等の一輩は、我が一族の者より一倍深智博識の者共であるゆへ、とても彼等に優ることは出來ない

からとて、懇懃に言ひ遺した。

然るに父の亡くなつた後、母は迦毗梨に向ふて、今の世に學問の上で汝に勝る者あるかと尋ねた爲め、迦毗梨は、我が一族の中には自分の上に出る者はないが、爾し沙門の一輩に及ぶことが出來ぬと申した。母は、それでは其法を學んではどうかとすゝめたるに、迦毗梨は、學ぶことは易いが、爾かしそれには沙門とならねばならぬ、自分は白衣の身であるで、仲間入りがむつかしいと申した。母は重ねて、それなら一寸似非沙門となつて、學問が出來たら、再び歸つて來たらよいではないかと申したので、それも尤もなりと思ひ、直ちに佛弟子となつて修行を致したるに、固より聰明なる性質であつたから、幾程もなくして、三藏の深意を諒解した。

他日母は迦毗梨に向ひ、此上は沙門の一輩にも退けを取ることはな

かろうと尋ぬると、迦毗梨は、學問の要は坐禪に若かぬ、爾かし自分はそれをやらぬから、どうても彼の人々に勝ることは出來ぬと申した。母は、それなら議論の度毎に、相手の者を惡口してやるがよいと敎へたれば、罪も過もない人々を、惡口することはよくないではないかと申した爲め、何に惡口さへすれば、屹度勝つことが出來るよと、自說を立て通した。

迦毗梨は母の辭を道理と信じ、其後議論の度毎に、自分の勝手が惡くなると、汝等の如き愚昧の者では分りはせぬ、汝等は畜生のようなもので、云はゞ駱駝か虎か狼かのようなものが、暫く人間の姿をしておるまでのものに過ぎないと、口を極めて罵つたが、業報は恐ろしいもので、今は其報ひを受けて、かゝる奇怪なる姿を受けておるのであると仰せられた。

見聞の諸人は、世尊の此物語を聞き、孰れも身口意の三業を慎まねば

ならぬと云ふことを諒解した。

＊　＊　＊　＊　＊

虚栄は婦人の天性とも申すべき程であつて、是れが爲めに男子の事業を破ることは往々ある。迦毗梨の母も、我が子を天下第一の賢者と讃嘆せられたいと云ふ一念に驅られて、遂に彼れをして悲惨なる業報を受けしむることゝなしたのである。そこになると、父親はさすがに賢者であつた。我が子を教へて自己の力量以外に手出しをすなと申聞かした。彼れ若し父の教訓を守つておつたならば、かゝる業報を受くることなくして終るべきであるに誤つて邪見なる母の教へに從ふたが爲めとりかへしのつかぬ不幸を招いたのである。

悪ほ罵詈は、その塲限りのものと思ふと、大なる誤りである、虎に非ざる者を罵つて虎と云ひ、狼に非ざる者を罵りて狼と云ふと、己れもやが

てその醜狀を受けて醜悪なることと此の怪魚の如き姿となるものである、而して是れたゞに死後に始めてその應報を受くるのみならず、現在に於ても、その互に相罵詈する時の相狀は、明かに人間の美德を失ふて、容貌の一分上にはたしかに畜生の形相を顯はすものである、誠に誠慄せねばならぬことである。世尊が嚴に吾人に對して口の四過を誡められたることは、誠にゆへあることである。

一九　恒伽達の得道

昔、世尊が羅閦祇竹園精舍に在しゝ時、その國の大臣にて、子供のないのを苦にしておつたものがあつた。

所が恒河のほとりに天祠があつて、靈驗あらたかなりとの評判があり、國中の人々は孰も其神德を渴仰してをつた。それで大臣も此の神

の力を蒙むつて一子を得んと思立ち、一日神祠に詣でゝ祈願するようは願くば神の大威德を以て、我れに一男兒を授け給ふべし、然らば我れは其報恩の爲めに金銀を以て天祠を飾り名香を以て神室を塗治し申さん、然れども萬一我が願を容れ給はざる時は、我れは當に汝の廟を壞ち、糞尿を以て神體を塗治すべしと。

廟神は大臣の祈願を聞きて倩ら思惟するようは、彼れはなか〳〵豪氣な男であるで、是非に其願を聞屆けてやらねばなるまい。萬一それが出來ぬと、屹度此の祠を壞して了ふに相違あるまい。然し自分の如き薄德では、おいそれと彼れの願ひに應ずると云ふ譯にも參らぬ。何んでも一つ目上の神の力を借らねばなるまいと。それで早速摩尼跋羅神を訪問して其理由を物語り、何卒ぞ一臂の力を貸して頂きたいと願ふた。摩尼跋羅神は、餘事は兎も角も、その事ばかりはとても自分の

力には及び申さずと辭退し、自分で毗沙門天王の許に參つて、願事を申上げて其助力を願ふて呉れたが、毗沙門天王も亦力及ばずとて、帝釋天の所へ相談に行かれて申さるゝようは、私の臣下に摩尼跋羅と申す者があつて、只今王舍城の一大臣より一子を授けられたしとの祈願を受けましたことでござるが、然るにその大臣と云ふは、至つて豪兒な達で、若し此の願を聞屆けられたらば、益々供養すべきも、萬一聞入れられぬと、直ちに天祠を破壞せんとの誓を立てたことでござる。廟神を始め摩尼跋羅も非常に苦心致しておることなれば、願くば天帝の加護を蒙つて、彼れに一子を授けんと存ず、幸に嘉納せられたしと。

帝釋天は、其れはなか〳〵の難事であつて、因縁なしでは出來ないことであるが、誰か下界に出生すべき因縁を有しておるものはあるまいかと、多くの天子の中を尋ねらるゝと、一天子の近々の内に天界を辭せ

んとするものがあつた。

帝釋天は其者を招きて、王舍城の大臣の子となるべしと申附けらるゝと。天子の云ふには、私は次生には出家を望んでをることでござりますゆへ、かゝる家に降生することは頗る迷惑に感ずる次第でございます。何分にも尊榮の家にては、俗を離るゝことは容易でござりませぬゆへ、私はどうかして中流の者の中に生れたいと願望致す次第なりと。

帝釋天は、其許に左樣な願望があることならば、此方にても充分加護を垂れて所志を果さしめてやるゆへ、是非共に大臣の子となるべしと勸められた。

天子も、左樣に仰せらるゝことならば、快よく仰せに從ひ奉らんと申上げた。

大臣の祈願は空しからずして、其後幾程もなくして一男兒を奉げた。形貌端正にして世に比類少き芽出度稚兒であつた。一門の歡びは譬へようのなき程である。それで相師を招きて命名のことを相談すること。相師は、豫て承れば、此度の稚兒は何れかの神へ祈願をして得られたことでござるが、それは孰れの神祠でござるかと尋ねたので、大臣は洹河の天神に祈願したと申したれば、相師はそれならば恒伽達と命名あそばせばよろしからんと申した。

所がこの恒伽達は、年の長ずるに從ひ、求道の志を起し、父母に向ふて出家させて頂きたいと願ふて止まぬ。父母は我一門は富貴比ひなく、産業亦廣大なり、汝をして是れを相續せしめんと欲することなれば、何んとして出家せしむると云ふようなことが出來やうぞとて、斷して許して呉れなんだ。

恒伽達は倩ら思ふようは、自分は此家に居つては、いつまで經つても出家の望みを達することは出來なかろう、是れでは何んとか他の方法を執らなければなるまい、どうせ尊貴の家におつては、浮世の事に纏はれて、出俗の望みは果せないで、一度他の卑賤の家へ轉生して、其上にて初志を果すより外には道はない、それがよかろうと、愈々決心した。

大膽なる決心を定めたる彼れは、或日窃かに家を出でゝ、自ら高巖より墜ちて命を損せんと企てたるに、不思議にも些少も身體を傷はぬ。今度は河の中に投身したるも、乍ち浮び上つて、少しも苦しみを感せぬ。それでは毒を仰いで死んと思ひ、毒盃を傾けたるに、毒氣が少しも身體に廻らぬ。我ながら奇妙に感じ、此上は他人の手を借つて命を果さんと思ひ定めた。

或時、阿闍世王の後宮の諸夫人方が、城下の園池中にて池浴せんとして衣服を脱いで林間に置いてゆかれたことがあつた。恒伽達は忍び寄つて、其衣服を盗みて持去ろうとしたるに、直ちに門鑑者の爲めに捕へられて、王の前へ突き出された。

王は大に怨り、弓を執つて射殺しようとせらるゝと、驚くまいことか、矢は乍ち反つて王の方へ向ふた。三度射て、三度共に同樣の仕儀となつた。王は大に驚き、弓を投じて、卿は抑も天龍鬼神の變化に非ざるかと尋ねらるゝと。恒伽達は、私は決してさる者には非ず、王舍城中の一大臣の子にして、出家を希望してその由を父母に願ふたるも、容易に聽許せられぬ爲め、自殺して餘處に生れんと思ひ、種々に若心しておることなりと、逐一に身上の事を話した。王はその志に感せられ、それでは自分が一ツ骨折りして出家をさせて遣らんと仰せられ、直ちに同道して世尊の許を尋ねて、詳細の物語りをなされたるに、世尊も亦深く彼れ

の志を嘉し給ひ、即座に弟子の中に加へ、種々の説法して聽かしめらるゝと、宿福の厚き彼れは、やがて大阿羅漢果を証得した。

かくて阿闍世王は世尊に向ひ、恒伽達の一身上の奇瑞について、其因縁を尋ねらるゝと、世尊は王の爲めに次ぎの説明をなされた。

昔、波羅柰國に梵摩達と云ふ大王があつたが、一日諸宮人を將ひて林中にて遊戯せられた。爾時諸采女は聲高々と詠歌して王の歡樂を助けたるに、時に林外に人あつて諸采女の歌をきゝ、節面白く唱和した。王は其聲を聞いて大變に立腹し、直ちに人を遣はして、聲の主を招捕らしめ、やがて斬罪に處せんとせられた。

爾るに聰明なる一大臣があつて外より入來り、楚囚の男を觀めてその罪狀を尋ねたるに、斯々の次第なりとの答を聞き、早速王の前へ出で、彼れの犯せる罪は輕きには非ざるも、而も別に交通姦淫の所作を爲

したるにもあらねば、是非に赦し給はれたしと願ふた。王も大臣の辭を尤と思はれ、遂に是れを放免せられた。

思ひがけなくも、大臣の爲めに赦免の恩惠を蒙つたる彼れは、深く其德に感じ、爾來大臣に仕へて、最も謹直なる勤めをなしたが、つく〳〵と思ふやうは、婬慾の人を傷ふことは、刀劍よりも甚し、我身の此度の災厄の如きも、全くそれが爲である。されば此の逆緣を大事因緣として、是れより出家入道せんには若かずと。由て其由を大臣に談じたるに、大臣も其志の殊勝なるに感じ、成道の曉には再び歸來して我を濟度せられたしと申して、快よく其願を許した。

其後彼れは山林に入つて、專ら妙理を觀察思念したるに、遂に精神開悟して辟支佛となつた。それで前約を踐んで城中に歸へり來ると、大臣の一家は大變に歡び、直ちに大檀越となつて、四時の供養を致すこと

ゝした。

かく物語り給ひし世尊は、茲に辭を改めて仰せらるゝやうは、今の恒伽達こそは、全く其時の大臣にして、其際人の命を救ふたるが爲めに、今は我身の上に其報ひを得ることゝなり命中天せず、且つは辟支佛を供養せし德によりて、今又我れに從つて得道したるなりと。王を始め一會の大衆は、世尊の物語りを開きて、限りなき歡びを得た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

人を救ふものは人に救はれ、人を殺すものは人に殺さる。私共の一代の行爲は、全く此規則に依つて活動しておるのである。思かなるものは、此理に暗きが爲めに、天を恨み人を咎むが、賢者は此理に明かなるが爲め、順逆の二境に出入して、少しも恨む所がないのである。

我等は既に此の大法の下に活動しておるものとすれば、徒らに我一身上のことを顧みて、彼此れと思痴をこぼすには及ばぬ、何事も自ら蒔き附けし種の芽を出したものと諦らめて、左視右顧することなく、自ら信ずる大道を奮進することこそ肝要なれ。

恒伽達の一代の歴史は正しく此理を証明しておるのである、死にとうても死なれねば、又その親が止めさしとうても止めしむることが出來ず、彼れは遂にその初一念を貫徹致したのである。因縁所成の威力は、實に大なる働きを有しておるものである。

二〇　貧女の燈

昔、世尊が給孤獨園に在しゝ時、城中に難陀と云ふ女乞食があつて、諸國王及び多くの人々が、我れも〳〵と佛及び衆僧を供養するのをながめ、深く我身の宿福の薄きことをなげき、折角の福田に遭ひながら種子

を蒔くことの出來ぬとは、何にたる薄幸の身であるかと、身を切る程に悲んでおつた。

然るに、難陀は、一日城内にて、さる慈悲深い人より一錢を惠まれたことがあつた。早速油屋に驅けつけて、自分の所思を述べて油を分けて頂きたいと頼むと。主人は其殊勝なる志をめでゝ、多分に油を注いで呉れた。

難陀は歡天喜地の思ひにて、直ちに精舍へ參り、うや〳〵しく一燈を世尊の許にさゝげ、やがて大誓願を起して申すようは、妾は只今貧窮にして、是れしきの小燈より奉ることが出來申さぬも、萬一此功德によつて、來世に智慧の明を得ることが出來申さば、妾はその明りを以て、一切衆生の垢闇を除き申さんと。かく發願し終りて、世尊を禮拜し、靜々と立去つた。

然るに其夕總ての燈は曉方頃に消え失せたるに難陀の一燈のみは、明赫々と輝いて、少しもその光力を減じなかつた。此日の當直は目連尊者であつたが、夜も明け放れたので、燈火を收めんとて廻はつて來られると。難陀の一燈が輝々と燃へておるので、尊者は白日に燃灯するも、無益のことなりと思ひ、手を擧げて是れを消そうとせられたるに、どうしても消へなんだ。

世尊は此樣子を眺められて、目連に向ひ、それは其方の如き聲聞の力にては、到底消すことは出來ぬ。よしんば汝が四大海水を灌ぎかけても、又は大嵐を吹かしても、斷じて消えは致さぬ。何分にも廣濟の大心を發したる人の施物なれば、その方達では、動かすことは出來ぬと仰せられたとのことである。

* * *

* * *

長者の萬灯よりも、貧者の一灯と云ふことは、實に味いある教訓である。思ふに萬灯と一灯とは、形式の上には、大なる相違はある、人は多く微々たる一小灯を顧みずして、赫々たる萬灯の光りを稱讃せんとするが、而も我大聖世尊は、斷じてかゝる形式上の光輝に走り給ふことなくして、如何に一微小灯たりとも、其是れを奉りたる大なる精神の輝きをめで給ふたのである。光は末にして、精神は源である。私共は、供養諸佛の行爲に就て、常に此邊のことを心掛けねばならぬことである。

精神のこもらぬ百萬の灯火は、一度大風吹き來れば、乍ち消滅すべし。然れども至心のこもれる熱烈の光明は、神通第一の目蓮の力にても如何んともすることが出來ぬ。人生の事業も亦然り、如何程表ばかりを飾り立てた所が、中に至心が存在しておらぬときは、決して永續は致しはせぬ。反つて一片犯すべからざる耿々たる至心の灯が點ぜられてあると、百代の末までも輝き渡るものである。誠に念佛は灯にして、信心は精神である。此心金剛にして、始めて念佛の功德をおさめ得べきなり、口さきばかり、如何に殊勝に稱名しても、中に信心が存して、おらぬと、一向に其德澤を蒙むることは出來はせぬ。

二一　尊者の勤勞

昔、南天竺に二人の比丘があつて、祇夜多尊者の盛名を傳聞し、遙かに罽賓國に赴きて、尊者の教を請はんとした。

かくて日數をかさねて彼の國に赴むきたるに、とある大樹の下で、形容枯槁したる老比丘が獨り窟前に焚火しておるのを見た。

二人の旅僧は近寄つて、貴僧は祇夜多大德を御存じかと尋ねたるに、老比丘は、能く存ずと答へた。それでは只今は何處におらるゝかと申

すと。上の第三窟にと答へた。

二人の比丘は、教のまゝに第三窟を訪ねたるに、其處にはさきの窟前の老比丘が、端然として座禪しておるのを見受けた。

遠來の二人は、怪疑の雲に閉されて、一時は口を開くことも爲し得なんだ。倩ら思うやうは、かばかりの大德なれば、我等に先き立つて茲處に來りおらるゝことは、少しも不審はないが、然し是れが果して大德なるや否やは、今一段の疑問に屬することであると、頗る其判斷に苦んだ。

其中、一人は前んで、尊者の如き威德ある方が、何故に自ら火焚きの如き賤業をあそばさるやと尋ねたるに。尊者は答へて、されば、我が往昔の生死の苦を念へば、假令ひ我が手足を燃くも敢て苦しからず、況んや衆僧の爲めに火を焚くが如きは、物の數にもあらずと申された。

時に二人の比丘は、往昔の生死の苦しみとは如何なる事にや、願くば

其教へを聞かんと申したるに。尊者は答へて、我れ往昔五百世の中、狗子の中に生れて常に飢渴の爲めに苦しめられ。其間、僅かに二回の飽食を得たことであつた。一回は或る醉人の嘔吐したる不淨物を食した時。一回は二人の夫婦者があつて、夫が野良仕事に出ておる後で、婦が食事の用意をしておつたが、その中に用事の爲めに外出したるにより、我れは直ちに家に這入つて盜み食ひをした。然るに食器の口が小さかつた爲め、頭を入れることは入れたが、容易に出すことが出來ず、非常に辛苦をしておると、夫が野良より歸り來つて、乍ち我が頭を切斷して了ふた。我が昔の辛苦の程を念ふと、今は我身を粉にしても、敢て厭はずと申された。

二比丘は尊者の因緣談を聞き、深く生死を厭惡するの心を起し、爾來熱心に修道に勵みたれば、幾程もなく須陀洹果を證した。

＊　＊　＊　＊　＊

少しく事が出來だすと、乍ち氣が弛みて安逸がむさぼりたくなつて來ると云ふことは、私共の一大弱點である。此弱點にみいられたるときは、やがて私共の破滅の時である。艱難に生れて、安逸に死すとの訓戒は、私共が寸刻も忘却してはならぬ金言である。

抑も安逸は昔を忘れるから生ずるのである。何人も昔の辛勞を思へば、決して今の安逸をむさぼる心は生じはせぬ。殊に向上の大道に向ふものは、此邊の注意を怠つてはならぬことである。永き生死の苦惱の程を思へば、今の修行の勤苦の程は、容易に堪ゆらるべきである。三途苦難の惡處を出でゝ幸に此の人身を受けたるもの、今にして再び永劫の極苦を受くべき哉、戒めずんばあるべからず。

先德の辭に、身はいやしくとも畜生におとらんや。家はまづしけれども餓鬼にはまさるべし。おもふことかなはずとも地獄の苦にはくらぶべからずとの仰せなり。誠に然り、苦樂共に程度如何の問題なり。幸に佛陀の慈訓を聞く者は、此心を以て心として、昌平安穩の生活をしなければならぬことである。私共は此小話を讀みて益々此訓戒の妙味を感するものである。

二二　火坑の太子

昔、世尊が舍衞國の祇樹給孤獨園にいましゝ時、城中に須達と云ふ長者があつた。稟性仁賢にして三寶を敬信し、日々精舍を訪ねて、塔寺を掃除することを勤めとしておつた。

一日、世務に驅られて精舍へ往詣する暇を得なかつたことがあつた。その時世尊は、大目連舍利弗及び大迦葉等をつれて塔中に入られ、自ら

その中を掃除せられたる後、諸比丘の爲めに、掃地に五功德あることを述べて、一には、自ら心垢を除き、二には、他の垢を除き、三には、憍慢を去り、四には、心を調伏し、五には、功德を增長して善處に生ずることを得べしと敎へられた。

時に須達長者は、用務を終ると共に、急いで精舍に參つてみると、恰もよし、世尊が比丘の爲めに掃地五功德の說法を遊ばされてある只中であつた爲め、謹んで拜聽し、やがてその終るをまち、世尊の御前に出でゝ、只今は掃地五功德のお話を承り、私一人の爲めのお話と難有承り申したと、衷心の歡びを申上げたるに。世尊は我が敎愛する一切の善法は、掃地と同じく孰れの所にも求め得らるべきである。それにつき汝に敎ゆべき話ありとて、次ぎの物語をあそばされた。

昔、婆羅捺國に梵摩達多と云ふ王があつて、能く國政をみそなはされ、

た爲め、人民は豐樂の悅びを得た。時に王夫人が姙娠せられたるに、それと同時に王夫人の頂上に、自然に一の寶蓋が現はれ、始終夫人に從ひまはつた。占ふ者あつて云ふには、是れは體內の王子が大福德あつて、他日四方に法を求めらるゝの瑞相であると申した。

斯て月滿ち、王夫人は端正殊妙の王子を誕生せられた。相者の辭に從ふて、名を求法と命せられた。王子は年と共に敎法を聞くことを樂まれ、自ら師を求めて法を聞かるゝのみならず、屢々人を遣はし、多くの珍寶を齎らして、敎を諸方に求められしも、いつも滿足せらるゝやうな善法を聞き給ふことが出來なんだ爲め、その都度涕泣懊惱して、自ら寧んじ給ふと云ふ時がなかつた。

爾るに王子の切實なる求法心は、遂に帝釋天に感應し、彼の天宮を震動せしめた。帝釋天は、今の震動こそは只事ならじと、早速に觀想の定

に入つて其由來を尋思してみると。全く王子の求法心の切實より來れるものであると云ふことが解せられた。それで直ちに身を一婆羅門に變じ、自ら降つて其虚實を驗べることゝした。

一日、婆羅捺國の宮城の門前に、氣高い一人の婆羅門が現はれ出で、聲高々と唱ふるよふは、我れに妙法あり、誰にても聞かんと欲する者あらば快よく敎へ申さんと。宮中の太子は、此聲を開き驚喜せられ、直ちに出でゝ接足作禮し、殿上に迎へ、好牀を設けて婆羅門を請じて是れに坐せしめ、かくて合掌して申さるよふは、仰ぎ願くば大師慈哀憐愍を垂れ我が爲めに妙法を解說し給へと。

婆羅門は、おごそかに答ふるよふは、法を學ぶことは甚だ難し、師をたづねて久しきに亘るに非らざれば、到底是れを了知すること出來ず。然るに今直ちに是れを聞かんと欲せらるゝも、理として許し難しと。

太子は是れを聞きて、如何にも仰せの如し、されば妙法解說の爲めに所望せらるゝ物あらば、何なりとも仰せ付けられたし、我一身は申までもなく、妻子珍寶、さては象馬の如きも、少しも惜する所なく、悉皆、大師に供養し奉らんと述べられた。

婆羅門は、太子の仰せらるゝ如き物は、我れにあつては一毫も望みなし、太子若し强ひて妙法を聞かんと望まるならば、深さ十丈の一大火坑を作り、自ら身を以てその中に投ずるの決心あらば、謹んで妙法を解說すべしと申した。

太子は是れを聞いて大歡喜し、早速に大火坑を作つて、自ら進んで其身を投ぜんとせられたるに、王夫人及び群臣は、いかで太子の所作に從ふべき、直ちに來つて太子を抱捉し、切にかゝる無謀の擧に出で給ふ勿れと諫め、一面又婆羅門に向ひ、大師願くば我等の爲めに太子をして火

坑に投ずるが如き、悲慘の振舞に出で給はぬよふにし給へ、されば國城珍寶は申すに及ばず、我等の妻子をも大師に供養し奉らんと哀願した。

婆羅門は答へて、此事は始めより自分が太子に迫つたわけでなく、若しかくも爲し給はゞ、妙法を解說せんと申した迄でなれば、それが爲め其方達が迷惑せらるゝことならば、妙法を說かざるまでのことである と申し、落付きはろふておる。

婆羅門の答は、太子の求法心を一倍に興奮せしめた。我れは曠劫來身命を捨てしことは限りなきも、未だ一句の妙法を開くことなし、幸に此明師に遇ひ、我所志を滿足せんとす、此際多少の恩愛の如きは顧みる所に非ずと。王夫人及び群臣の諫を用ゐず斷然火坑に投せんとせられた。

王夫人及び群臣は、太子の志の動かすべからざるをさとり、今は他の

手段に依らざれば到底太子を引留難しと觀念し、卽ち一日に能く八千里を走る駿足の象を出し、是れに使者を乘らしめて閻浮提内の諸大臣の許に遣はし、速かに來會すべしと命せられた。

諸大臣は早速に集まつて參り、太子に向ひ合掌して、願くば我等の爲めに火坑に投じ給ふ勿れ、太子にして火坑に投じ給ふが如きことあらば、太子御一人の爲めに一切を孤棄し給ふことなるべしとて、ひたすらに歎願した。

此時太子は、諸大臣に對し、我れは無數の生死の中、或は地獄畜生餓鬼の中に在つて、更る〳〵相殺害し、火燒湯煮、飢餓困苦、一日の中にも稱計すべからざる苦惱を受け、而も未だ嘗て法の爲めに益あることなし、汝等は何故に我れを諫むるや、我れは此臭身を以て無上菩提の道を求め、此の身命を捨てゝ、誓つて衆生を度して生死海を出でしめんと欲する

なりと申聞かされ、やがて身を躍らして火坑に投ぜんとし、顧みて婆羅門に向ひ、大師よ、願くば我が爲めに妙法を說かるべし、我れ若し命終せば、遂に法を開くこと能はずと述べらるゝ、婆羅門は直ちに次の偈を誦した。

常行於慈心、除去悲害想、大悲愍衆生、矜傷爲雨涙。修行大悲者、同己所得法、救護諸群生、乃應菩薩行。

太子は此偈を聞き、歡喜の情に堪へず、直ちに焰々たる大火坑中に身を投じ給ひしに、驚くまゐことか、今迄で大火坑と思ひしものは、乍ちに蓮華池と變じ、太子は安らかに蓮華上に端座しておられた。爾時大地は震動し、諸の天華を雨ふらし、積んで膝に至らしめた。嚮きの婆羅門は、乍ち其本身を現はして帝釋天となり、太子を讃嘆して申すようは、汝今一偈の爲めに火坑の中に投じて身命を顧みることなかりしが抑も

何等の所願あつて、かゝる大膽なる擧に出でたるかと。太子は、然り、別に所願とてもなし、たゞ無上菩提の大道を求めて、衆生を度脫せしめんと欲するのみなりと答へられし所。帝釋天は、未曾有の事なりと讃嘆し、やがて天上へ歸へり去つた。

梵摩多王を始め、諸臣の人々も深くこの奇特を感嘆し、太子を擁護して宮中へ歸へつた。

世尊のたまはく、爾時の太子は淨飯王にして、王夫人は今の摩耶、而して太子は卽ち我が身是れなりと。

* * * * * * *

大覺の光明は、突爾として菩提樹下に輝き渡つたものではない。曩劫以來の千辛萬苦の修行力によつて、始めてかゝる顯赫たる光明をかゝやかされたるものである。火坑太子の物語は、明かに其理由を說明

し、私共をして首肯せしむる處があるではないか。私共は、彼の須達長者が塔地を掃ふが如く、我四周の所縁の塵勞を掃ひ、かねては心中の妄塵を掃はなければならぬことである。氷を觀ると乍ち寒を覺へ、火を觀ると熱を覺ゆ。所縁の境は常に大なる感化を私共に與ふるものである。されば徒らに修養々々と口に云ふには及ばぬ、人生到處に修養の道場あり、注意の如何によつて、一切萬事を我が良師友とすることが出來るものである。

迷ひの世界に生れ出でゝ、而も迷ひを離れんと欲するものが、即ち私共の如き道に志す者の境遇ではないか。流れに從ふて下らば氣樂なるも、是れに逆ふて遡らんか、困難なることは云はずも知れたことである。向上の大道に進むに當つては、始めより火坑に投ずる底の大覺悟がなくてはならぬことである。

而も投じてみれば焔々たる火坑も乍ち蓮華寶池と變じ、清冷の微風自ら身邊に起るものである。昔は南都北嶺の僧達より迫害の火坑を受け給ひし親鸞聖人は、今たしかに華座の寶臺に在つて、百萬の人々より渇仰せられ給ふたではないか。一死以て肉身を滅却したる楠公は、明かに帝國の重鎮となつて、長へに國民の精神を支配しておる。鋼鐵堅きが故に能く秋霜の白刃を煉成す。私共は難を避けて易に就き、徒らにぬらくらとしておつては、碌なことが出來るものではない。火坑なる乎哉、火坑なる乎哉、道の爲めには鼎鑊甘きこと飴の如しの覺悟がなくてはならぬことである。いつもく氣儘放題の遣り放しでは、とても大なる光明は認められるゝものではない。

聖人詠じてのたまはく。

たとひ大千世界に、

みてらん火おもすぎゆきて、
佛の御名をきくひとは、
ながく不退にかなふなり。

と。如上の一小話は、此和讃の事實上の物語りである。今更ながら、古聖の我をあざむかざることを感ずる次第である。

二三　盜賊の發心

昔、世尊が毗舍離國にて說法しておられし時、城中に一人の馬鹿者があつて、始終他人の財寶を偷みて、不義の快樂を極めておつた。城中の人々も、彼奴は不屆なことをしておると、薄々ながらがんすいてはおつたが、然し馬鹿者のことなれば、誰とて是れを荒ら立てゝ官に訴へ出でようともせなんだ。

或時、此馬鹿者が、僧坊の中に好い銅瓶があると云ふことを聞き出し、そいつは近來の好い獲物である、どうかして倫み出さんと思ひ、參詣人にまぎれて坊中に這入つたが、然かし目指す獲物はどこにもない。それで、是れは失敗つたりと、茫然としておると。此時彼方で住僧の聲高々と、

論說諸天眼眴極遲、世人速疾

と云ふ偈文を唱へ出した。馬鹿者は、聞くともなしに此句を深く記憶し、スゴ〳〵と立去つた。其頃、或外國の商人が毗舍離國へ參つて、非常に高價な摩尼寶珠を國王に献上した。王は大に歡ばれ、直ちに是れを塔頭に飾り付けられた。

馬鹿者は是れを眺めて、天與の賜なりと歡び、ホク〳〵顏で夜分の中に偷み取て了ひ、後生大事と隱して了ふた。

王は、塔上の寶珠が盗み去られたと云ふことを聞かれ大立腹をせられ、誰にても寶珠の泥坊を密告して參つたならば、重賞を與へんとふれだされたるも、いつまで經つても申出て來る者がない。王の怒りはなか〳〵に解け去らぬが、爾し如何んとしてみようがない。

時にある利潑な臣下があつて王に申上るには、此頃は國内誠に安穏にして、人民悉く豐乘を極めておることなれば、泥坊なんかをする者とてはありませぬが、只一人の馬鹿者があつて、常によろしからぬ振舞を致し、其者のことは、國中の者も大概承知しておることでございます。思ふに此度の所作も、屹度彼奴の所業に相違ありますまね。爾かしそれならばとて、縛り上げて參つて、鞭打して拷問致しました所が、馬鹿シブトク白狀致しませぬにきまりております故、大王よろしく一種の計策を以て彼奴を白狀せしむるがよろしからんと。

王は、計策とて、どうすればよいのであるかと尋ねられた。

臣下は王に敎へて、それは斯ふなさるがよろしからん。先づ人を遣つて馬鹿者にしたゝか酒を飲ませ、醉ふて前後不覺となるを俟ち、そつと此の御殿の内に運んでまゐるのであります、而して御殿は前以て充分うつくしく飾り立ておき、恰も天上界の如くに見せかくるのであります。すると馬鹿者は醉が醒むると共に、ハテ不思議なり、己は天上界へ來たのかと狼狽するに相違ありませぬ。爾時多くの妓女は、管絃鐘鼓ではやしたてゝ、そなたは閻浮提におられた時に、塔上の摩尼寶珠を偷み取られた果報で、こゝに來られたのである。どうかそれを見せて下されと責め立てしめたら、屹度白狀するに相違ありますまねと申した。

王は、それは如何にも妙計なりと賛嘆せられ、直ちに實行に着手せら

れた。

泥酔の馬鹿者は伎樂の聲に驚かされて、ねむた眼をこすりながら起き上つてみると、在來の己が住家とはちがい、金銀珠玉のちりばめたる、名も云はれぬ宮殿であつた。こいつはおかしいぞ、俺は何とかしておりはせぬかしらんと、四邊をキョロ〳〵眺め廻はすと。天女をあざむく美人連が寄てたかつて、我れ一と媚を呈し、口々に貴下はその昔閻浮提にいましゝ時、塔上の寶珠をお取りなされ、その果報に依て、今の天子の御身柄とおなりなされたとのことでありますが、一體それは本當のことでございますかと問ひかけた。

馬鹿者は、實はさうだと白狀しようかと思ふたが、それでは或は後難が來るやうなことがありはしまいかとためらふた。すると美人連は、是非に實際の話を聞かせて呉れとせきたてゝ止まぬ。此時馬鹿者が

不圖氣付いたのは、昔僧房で聞いた、

論說諸天　眼眴極遲　世人速疾

の偈文である。こゝぢや、一つたしかに天女か否かをためしやらんと、ジット美人共の眼元を凝視てみると、孰れもまばたきすることがはやい、こら本當の天女ではないはい、屹度國王が俺をわなにかけて、白狀させようとしておる謀計に相違あるまいと覺悟し。何んと云はれても、頭を低れて一口も返事をしなかつた。無言に勝る豪氣はなく、國王も如何ともすることが出來ず、そのまゝ解放することゝせられ、危險な所で命拾ひをした。折角にたくんだ謀計も、其効を奏せなんだ爲め、王は大變に落膽せられた。

然るに臣下は復第二の策を献じた。大王、今度は改めて彼の馬鹿者をお側近くにお呼びあそばされ、詐つて御信用あそばるゝ如くお見せ

かけになり、彼れを執り立て大臣と爲し、寶藏の番を仰付けらるべし。尤も藏中の寶物は、豫めおしらべおかれて、失なはぬようにせらるゝことは肝要でござります。かくて多少の月日の經つた後に、大王より彼れに對して、お前が藏の番をして呉れてから、何一つ脱失るものなく、自分も大變滿足に思ふておることであると、物柔かにお話しかけなさるのである。すると彼れは屹度歡び入るに相違ありませぬ。其時大王より徐ろに寶は先般失ふた寶珠は、お前がどうかしたのではないかとお尋ねなされたら、必ず白狀致すに相違ありませぬ。と云ふものは、彼れも今は王の寶藏さへも打任かすると云ふ親任を得たことなれば、安心して一切の事を白狀致すべしと、事てまかに言上した。

謀計果して圖に當り、今度は遂一白狀して仕舞ふた。

爾時、王は偷臣に對し卿はさきに醉ふて我が宮殿に在つた時、何故に

白狀をせなんだかと尋ねらるゝと。偷臣は、私は昔僧房にはいつた時、住僧が、

論說諸天　眼眴極遲　世人速疾

の偈文を誦しておるのを聞きました故、其偈の敎への通りに諸宮女の眼元をしらべ、これは天上界ではないと云ふことを覺りました爲め、後難を恐れて白狀致しませなんだと申上げた。

王は、偷臣の物語を聞かれて、一方ならず感嘆せられた。それに日頃熱望しておられた摩尼寶珠も手に入つたことであるで、偷臣の罪を問はずして許された。

偷臣は罪科を許されたことを歡び入り、直ちに王に伺ひ出家せんことを願ふた。

王は、それは許さぬことでもないが、然し卿は現今大臣となり、尊榮富

貴の快樂を極めおるに、何を苦しんで出家せんと思ふかと尋ねらるゝと。偷臣は答へて、さきには僅かの偈文を覺へしのみにて、それが爲めに九死に一生を得たことなれば、此上に尚數多き偈頌を修習致しましたならば、屹度大利が得らるゝに相違ありますまいと思ふが爲めなりと申上げたれば、王は笑ひながら其請を許された。かくて佛門に入つて修行の道を勤修したるに、宿善開發して芽出度阿羅漢果を證得した。

* * * * * *

聽聞し候へば、御慈悲にて候間、おのづから信の得らるべく候、とは蓮如上人が聞法のゆるかせにすべからざることを敎へられたる慈訓である。如何にも上人の仰せの通りである。今の偷臣も一句の偈文を聞いた爲めに、我が命を拾ふたるのみならず、遂にはそれが動機となつて、羅漢果を證つたことであつた。宗敎上の利益は、世の物質上のそれ

とは、全く其趣きを異にしておるものである。即今一句を聞き、一文を味ふたからとて、錢出して品物を買取るが如く其場に効能が見られるものではない。他日何かの緣に觸れた時に始めて反省の大動機となつて顯はれ出づるものである。されば此利益は珠算の上からは割り出されるものではない。

然れども、蒔かぬ種は生へはせぬ。聞いておかねば反省の動機は得られはせぬ。夫故佛法は世間のひまをかきて聞けよと、蓮師はおすゝめなさるのである。私共は幾等世話敷からとて、一日の中に、一時間の暇のないことは少ない。巧みに是れを利用すれば、どんなことも出來るものである。願くばお互にかゝる時間を徒消せずして、古聖の慈訓を聞き、ひだ口、惡口を叩くかわりに稱名念佛を勤めようではないか。

二四　醜女の歡喜

昔、世尊が祇樹給孤獨園に在しゝ時、波斯匿王の大夫人が波闍羅と云ふ、一皇女を降誕せられた。然るに此皇女は如何なる宿業の現れにや、肌麁くして駝皮の如く、髪は強くして馬の尾の如く、世にも比類なき醜女であつた。王は非常に不快に感せられたが、何分にも大夫人の出である爲め、他所へ遣る譯にもゆかず、窃かに内官に命じて深宮の内にかくまひ、決して外人に見せぬようにせられた。

やがて皇女も年頃になられた爲め、王は又女婿を選ぶことに一方ならず苦心せられ、遂に腹心の一大臣を招きて、豪姓居士の者にて貧乏に苦める者あらば、求め來るべし、然らば我より巨萬の財寶を與へて、其者に波闍羅を嫁せしめんと思ふゆへ、汝はよろしく我意を帶し、然るべき

人物を尋ね來るべしと仰せ付けられた。

勅命を奉じたる大臣は、早速に目的の人物を探索したるに、遂に一長者の子にて、今は見る影もなく零落したる者を尋ね當り、直ちに相具して王の宮中に參候した。

王は、若者を屏處に招き、一部始終を物語つて波闍羅を娶はさんとせらるゝと、殊勝なる若者は、快よく其旨を領し、王に對して、大王の勅命とあるからは、假令狗を以て娶はさるとも、敢て辭退は申さゞるべきに、而も大王の皇女とあるからは、如何で異存の申すべきかと言上した。

王は大歡喜せられ、即ち迎へ入れて皇女の夫となし、且つ新夫婦の爲めに、七重の閣構への宮殿を建てゝやられた。

かくて王は新夫に向ひ、見掛けの如き醜婦なれば、斷じて他人に見せしむることなかれ、汝自ら閤門の鑰を持つて、出入毎に是れを閉ぢ、他人

をして一歩も内庭に立入らしむる勿れと仰せ附けらるゝと。新夫は堅く王の勅命を守らんと誓ふた。王は大に歡ばれて、即座に新夫を以て大臣とし、一切の財物は、悉く王の内帑より支出することゝせられた。

然るに此時分は城中の貴族が、月々讌會を催し、夫婦同道にて共々に娛樂することが流行しておつた。所が新大臣のみは、いつも單獨にて出掛けて參るので、他の人々は種々と不審がつた。それで誰云ふとなく、是れは決して一通の譯合ではあるまい、彼の人の妻が絶世の美人にて、暉赫曜絶しておるか、さなくば極醜無比にして、他人に見せられぬ爲めかに相違あるまい、兎も角一度實際を見屆けようではないかと云ふことになつた。かくて一日讌會の折りに乘じ、新大臣を醉ひつぶして、窃かに鑰を取つて内庭に入らんと企てた。

是より先、波闍羅夫人は、我身の宿福の薄きことを非常に苦惱し、生れて一國の皇女となりながら、淺間敷も一室の内に幽閉せらるゝことよ、世には大慈大悲の世尊が在すときく、責めてはかゝる御方に謁して、一席の教訓にても承り、我が斯の心の中の苦惱を慰めたきことであると愁嘆せられた。

大覺世尊は精舍の中に在しながら、波闍羅夫人の心願の程を遙察せられ、時を移さず、獅子の法座を下つて夫人の宮中へ降臨あそばされた。

夫人は佛の來現せられたるを拜し、深く歡喜し、熱心に威容巍々たるお姿を凝視しておると、不思議にも夫人の容貌も次第に變じ來り、醜惡の形相は自然に消滅せて、見る間に絶世の佳人と變じて了ふた。すると世尊は夫人の爲めに懇ろに説法せられしに、即座に須陀洹道を證得した。かくて世尊は靜かに立つて精舍に還へられた。

恰もよし、さきに新大臣の鑰を取つて内庭に忍び込みたる人々は、其

時戸を排いて入り來りたるに、比類希れなる花の如き美婦人であつたので、人々はかゝる佳人を何故に供ひ來らぬかと、不思議の疑雲に覆はれなから、讌席に歸り來たが、幸にも新大臣が醒めておらなんだので、始めの如く鑰を腰に附け、何喰はぬ顔をしておつた。やがて醉より醒めたる新大臣は、我家に歸へつてみると、天女の如き美婦人がおるので、非常に驚きて、其誰人なるやを尋ねたるに、美人は、誰とて妾は貴郎の妻なりと申した。新大臣は容易に會得が出來ぬ、我妻は極めて醜女であつて、決して貴方の如き佳人に非ずと申すと、波闍羅夫人は、世尊の來現に依つて、かゝる功德を蒙りたりと、事の次第を物語り、且つ此旨を父なる大王に言上せられたしと申した。

新大臣は、歡天喜地の有樣にて、早速正殿へ驅け付けて波斯匿王に面語し、夫人が拜顏したき由を申上ぐると、王は言下に、彼れの事は云ふて

呉れるな、左樣なこと申しておるなら、益々嚴重に戸締りして、一歩も室の外へ出さしてはならぬと申された。

新大臣は、實は不思議なことがあつて、皇女は佛の恩惠により、今は見かへる如き美人となりかわれりと申すと、王は左樣なることならば、早速連れ來るがよいと歡ばれ、直ちに車を命じて正殿へ迎へられたが。果して絶世の佳人と變形しておられた爲め、王の歡びは譬へようのなき程であつた。それで直ちに大夫人を招き、新夫婦と同道にて、給孤獨園に世尊を尋ねて、大恩を謝することゝせられた。

波斯匿王は世尊に向ひ、皇女の宿業に就て說明を請はるゝと、世尊は王の爲めに次ぎの因緣談を物語られた。

昔、一大長者あつて、深く辟支佛に歸依し、常に其供養を致しておつた。然るに此辟支佛は、至つて醜き姿であつたが、長者の一小女は、辟支佛を

見る毎に、如何に醜陋なることよと、口を極めて惡口慢罵した。然るに辟支佛は、一言も是れを咎められなんだ。かくて入涅槃の前に當つて、種々の神變不思議を顯はして、長者の家族に觀せられしに、家族の人々は益々隨喜渇仰した。

時に小女は、深く平常の慢罵を悔ひて、至心に其罪を許されんことを歎願したるに辟支佛は快よく其懺悔を納れられた。

かく物語らるゝと共に、世尊は彼斯匿王にお話しなさるには、爾時の小女こそは、現に今の王女なり、昔、惡不善心を以て賢聖辟支佛を毀呰せられし故、自ら口過を造つて爾來永へに醜形を受けらるゝことゝなつたのである。然れども後日辟支佛の神變不思議を見るに及んで、自ら改悔せられし爲め、今の端正の身を受けられしことである、富貴榮花の身に供はるは、全く辟支佛を供養せられしが爲なるべし。されば大王、

何人も身口を謹つて妄りに他を輕呵すべからずと。

王を始め一切大衆は、佛の此因縁談を聞いて限りなき德を得た。

* * * * * *

世の中の事は一つとして其由て來れる因縁のなきものはない。容貌の婉麗なるも、將たその醜きも、一身の幸福なるも、又その薄幸なるも、孰れも皆全く蒔た種より芽を出したものであつて、決して親を恨むことも出來ねば、又その良人を咎むることも出來ないのである。過福の本源は、我自身の內心に存在しておるものである。

辟支佛の容姿を笑ふたが爲め、波闍羅夫人は乍ち醜女の應報を受けたのである。惡心と惡口とは、必ず我一身を醜惡ならしむる大事因縁となると云ふことは、斷じて忘却してはならぬことである。而て此事たるや、啻に死後の身上に現出するのみならず、現在に於ても明かにそ

の報ひを現はすものである。見よ、平常は天女をあざむくが如き美人にても、一念慎恚の惡魔に驅られて惡口罵詈の毒舌を吐くと、乍ち一見肌に粟を生ぜしむるような醜惡の容姿と變ずるではないか。反之て、温容迫らずして、常に大慈悲の歡びを有するものは、假令身は一段の容色を備へざるも、一見人をして敬慕の念を生ぜしむるものである。されば世尊が嚴に口過を誡め給ひしも、誠に故あることである。

他力金剛の信心はたしかに容色を婉麗ならしむるの源泉となるものである。經に曰く『諸佛世界、衆生之類、蒙我光明觸其身者、身心柔輭、超過人天』と、蓮如上人は此の辭を解して、信を得たらば、四行にわらく物も申すまじきなり。心和らぐべきなり。觸光柔輭之願あり、又信ないれば、我になりて、詞もあらく、詞も必ず出來する者なりと仰せられている。先哲の教誡用意周到である、世の婦人たる者は、深く靜思せなければならぬことである。

二五　鸚鵡王の諫言

昔、迦尸國に惡受王と云ふ大王があつた。王は實に極惡非道で、如何なる殘忍なことをしても、自分の思ひの儘を遂り通すといふ性質であつた。されば、たとひ商人から寶物を買取つても價を拂はず、少しでも目欲い物があると、誰彼の別ちなく强制的に掠奪した。是れが爲めに天下の人民は、誰一人として王の所行を惡み嫌はぬ者とてはなく、果ては津々浦々に至るまで、寄るとさはると、王の惡評をするようになつた。

此時、とある林の中に一羽の鸚鵡王が居つたが、途行く人々の王の非道を談り合ふのを聞き、心の中に思ふようは、我は鳥類ではあるが、而もなほ王の非道なることを知る、誠に此の暴君の下に苦められている人

民こそ憐むべきものである、いざ是れより行いて王を諫め、民を塗炭の苦しみより救出さん、我れ若し善言を以て王を諫めなば、よもや我言に從はざることもなかるべし、必ずや鸚鵡王すら此の善事を知る、況んや我れは人の王として非道を行ふは、實に恥づべきことなりと悔悟せらるゝことであらふと。かく決心し、やがて天空遙かに王の園中に向ふて飛び去つた。

時恰もよし、王妃が園中を散歩しておられた。鸚鵡王は羽叩きして言ふには、聞く大王は、此頃暴虐日に甚しく、此が爲めに人民は非常なる苦しみを受け、今や其非道は禽獸にまで及んでおる、然れども人民は王の暴行を恐れて、表面には小言いふものはなきも、心の中には恨を懷かぬものは一人もない、今や王の惡評は、天下中にひろがり渡つた、加之ず王妃も亦無道の所作をなすること、王に異なることはないとのことで

ある。萬民の父母でありながら、どうして此の如きことをなさるのであるかと。王妃は此の語を聞き非常に怒り、おのれ小鳥の分際として、國王を罵るとは不屈至極なりとて、直ちに從者に命じて是れを捕へしめられた。

鸚鵡王は驚く氣色もなく捕へられた。王妃は直ちに王の前へ差出された。

すると王は鸚鵡王に對して云はるゝには、汝は如何なる故に我を罵るや、我が如何なる所作を見て無道と名づくるのであるかと詰問せられた。

王の難詰に對し、鸚鵡王は靜かに答ふるようは、されば、非法無道と申すことは數多くあるも、就中、次ぎの七事の如きものは其重なるものにて、是れが爲めに王の一身を危くするのである、七事とは、

一には、王は、女色に耽つて身が修まらぬ。
二には、王は、酒を好みて、それが爲めに國事を忘れらるゝことあり。
三には、王は、園碁博奕を好みて、禮敎を修めらるゝことなし。
四には、王は、殺生を好んで、慈悲の心なし。
五には、王は、野鄙の言語を好んで、高尙の語を使用せらるゝことなし。
六には、賦役は重くして、刑罰は常法を越へたり。
七には、義理を忘れて、民の財物を奪はる。

以上の七事は、明かに是れ王の一身を危くせしむる行爲なるが、尙此の外に三種の惡事を行はるゝにより、國家は累卵の危きに頻しておると申した。

王は此辭を聞かれて、何をか三種の惡事とするやと尋ねらるゝと、鸚鵡王は答へて。

一には、邪智奸佞の人を近けらるゝことは、第一の惡事也。
二には、賢聖を近けられぬことは、第二の惡事也。
三には、他國を征伐することを好んで、敢て人民を休養せられぬことは、第三の惡事也。

此の三大惡事にして除かれざる時は、國家の衰亡は旦夕を俟たぬと申述べた。

かくて鸚鵡王は辭を改めて申すようは、一體國王たるべき者は、萬民の仰ぐ所にして、恰も橋の如く萬人を善道に導くべきはづのものではないか、又王は秤の如く、公平なるものにして、敢て親しきがゆへに近け、疎きがゆへに遠くると云ふが如き、偏頗の所置をなすべきものに非ず。

王は大道の如く、聖人の敎へに違ふべきものに非ず。

王は日の如く、善く世間を照すべきものなり。

王は月の如く、物に對して清澄なるべきことを要す。
王は父母の如く、萬民を一子の如く愛愍せざるべからず。
王は天の如く、一切萬物を覆育すべき任務あり。
王は大地の如く、一切萬物を運載すべき責任あり。
王は火の如く、萬民の患を燒盡せざるべからず。
王は大水の如く、四方を潤澤せざるべからず。

されば過去の輪王は、前上の任務を盡すが爲めに、十善道を行じて天下を治めたりと聞く、王も願くば非法を誡めて、善道を修め給ふべしと申上げた。

王は此の辭に深く感動し、直ちに國内に德化を布かれた爲め、惡名は乍ちに消失したるのみならず、擧國の人民は我れも〳〵と忠義を盡すようになつた。

＊　＊　＊　＊　＊

一國の王ともあるべき者が、鸚鵡の諫めによつて先非を悔ひ、正道に立ち歸へられたと云ふことは、一寸と聞き取れぬ話であるが、爾かし心機の一轉するは、必ずしも顯著なる事件に出遇ふた時ばかりではない、至極つまらぬ樣な事柄でも、變化の動機となることはまゝあることである。況んや若しさる賢臣があつて、前上の諫言を鸚鵡に敎へて、國王及王妃の前に申述べしめたものとすると、此の一小話は活々して來るではないか。

思ふに王の非行に對しては、天下の忠臣は擧りて是れを諫め、擧國の民衆は泣いて是れを訴へたのであるが、是等の事が一つとして王の心を動かすことが出來なんだ。されど一小鳥の囀りが能く王の心弦に觸るゝことが出來たと云ふことはなか〳〵面白いことである。

鸚鵡の諫言は、又能くその當を得ておる、始めに七惡事を擧げて、王の素行を誡め、次ぎに三惡事を述べて、治國の大綱を誤れることを匡し、最後に聖王の執るべき方針を說きて、親切に王の反省を促がしておる、理非を分判すること此の如く、辭を盡すこと此の如くなるがゆへに、暴惡の王も遂に能く其非を改められたのである。補弼の任に當つて其君を善道に導かんと欲するの士は、能く這般の機微を諒解せねばならぬことである。

二六　大逆の應報

昔、印度の外道の修行者の中に、一人の端正殊妙の尼があつた。一日、人あつて尼に向ひ、御身の如き容貌の好い方は、疾くにどちらへか嫁づかれてあるべき筈なるに、どうして尼になんかなられたのぢや、どうも

合點が行かぬと尋ねた。

尼は顏をあからめて、左樣にお尋ね下されますと、一應身の上話を致さねばなりませんが、仰せの通り妾は十人並より好い方でありました爲め、年若い中に緣談がとゝないさる方へ嫁つき、一人の端正無比の男の子を設けました。然るに其子が長じて年比になりますと、いつともなく病付きまして、いろ〳〵と良醫の藥をいただきましたが、一向に良い目がみへず、一日々々と瘦せおとろへました。妾は我が子の枕元に就て、どうしてこんな病氣にかゝつたかと、涙ながらに愚痴をこぼしますと。子供は、是れは實に申上げやうのない不都合なことがありますので、自分は因果と諦めて死にますと申しました。それで妾は、それは又けしからぬ心得違いと云ふもの、世の中に命にかへられるものはない、何なりとも此の母には遠慮なく申すがよい、及ぶ限りのことは盡し

て上げるからと申聞かしましたに、始めの中はどうしても申しませなんだが、餘り妾がしつこく尋ねました爲め、遂につゝみきれずして、實は母上のうつくしいのにこがれて、これが病付きになつたと申しました。餘りの辭に妾も返事のしようがなく、一時は途方にくれましたが、然し命は旦夕に迫つておりますと云ふ場合で、萬一打捨てゝおかば、可愛い我が子は彼の世へ旅立つことは必定と存じ、茲に淺間敷くも子供の意に從はんと致しましたに、さて〳〵恐ろしいことには、大地が眞二つに擘裂て、我が子は生ながら其内に陷りました。妾は氣も狂亂して、我れ知らず我が子の髪の毛を攫みますと哀れや、その一捉の髪が、今は涙の種となつて妾の懷中に殘つております。思ふに妾のやうな因果なものは、廣い世の中にも、又とござりますまいと、涙と共に物語つた。

* * * * * *

犢犢の愛は、斷じて眞實の恩愛ではないがゝる恩愛は、屹度我が子の行末を誤らしむるものなることは、尼の物語りの如くなるものである。人の親たるものは、深く注意せねばならぬことである。

恩愛は親が子に對する無上の惠みではあるが、而もそれが、正道に向はぬ時は、反つて大なる懷恨の種となるものである。言ふがまゝに我が子の希望に從ふのは、決して正しき恩愛とは申すことは出來ぬ。種々に善巧方便して、我が子を正道に向はしむるのが、卽ち眞實の恩愛である。親は子を指導するものであつて、我が子に指導せらるべきものではない。能く主客を轉倒せぬやうに心掛けねばならぬことである。親の心は我が子に對する時は、いつも慈愛の源泉となり、恩愛の泉は混々として流れ出づるものである。然れども子たるべきものは、決して是れを濫用してはならぬことである。若し夫れ恩に悃れて是れを濫

用するときは、假令ひ此一小話の主人公の如き、最大罪惡を犯さずとも、社會の大地は忽ち寸裂して、永く世の中に浮む瀬のなき不幸者となりて、一代を了らねばならぬことゝなるのである。

私共は此一小話を讀むに當り、益々如來の恩寵の公明正大なることが難有く思はれ、唯除五逆の抑止の文が如何に懇切に、其眞情を發露し給へるものなるかを、一倍に深く難有く感ずるのである。

二七　受齋の二梵士

昔、世尊が祇樹給孤獨園に在しゝ時、一夜五百の天子が天降つて世尊を供養し、世尊の說法を聽聞したことがあつた。

翌日、阿難は世尊に向ひ、昨夜光明照耀し、精舍の內常に逾りたるは、何等の因緣に基くものなるやとお尋ね申すと。世尊は次ぎの物語をな

された。

昔、迦葉佛の在世の砌り、二人の婆羅門があつて佛に從ふて法を聞き、共に齋戒を受け、一人は其功德を以て上天を願ひ、一人は人王たらんことを求めた。かくて諸婆羅門の聚會の席へ歸り來ると、諸婆羅門は定めて空腹であらうで、早く食事をするがよいと勸めた。

所が、二人の者は、自分達は今日受戒をして來たから、時を過ぐしては食事をせぬとて、諸人の勸めを辭退すると。相手の婆羅門等は、婆羅門には自ら婆羅門の作法があることぢやで、何にもさう齋戒なんかを守るには及ばぬではないかとて、是非に食事をせよと勸めて止まなんだ。

するとさきに上天を願ふた一人は、どうぞう飲食して齋戒を破ぶつた爲め所願をはたすことが出來ず、命終して龍中に生を受けた。他の一人は、斷じて箸を執らなかつた爲め、其所願を果し國王の家へ生れか

はつた。爾るにさきに龍中に生を受けた一人も、前生に共に齋戒を受けた因緣に依つて、此の國王の園池の水中に生處を受くることゝなつた。

國王の園丁は、日々種々の果實を送つて、王に奉つておつたが、一日池水の中で、一つの美果を發見した、色香共に麗しくして尋常の物ではなかつた。

爾時、園丁の思ふやうは、自分が內證で此の果物を持出さうとした所が、屹度門監の男が咎めて取り上ぐるにきまつておるゆゑ、そんな失敗を受くるよりも、此方から先方へ差出さうわいと。それで其儘門監の男に手渡して了ふた。

門監は、園丁から果物を受取つて倩ら考へるようは、是れは自分で勝手に持ち出すことは出來まい、萬一黃門に發覺せられたら嚴罰を蒙ら

ねばならぬ。夫れよりも黃門へ差上んとて、其儘持參した。

黃門は、珍奇な果物を得たので、これはめづらしい物ぢや、この儘無駄々々と食ふのも惜いことであるで、それよりか大夫人は常に自分のことを國王に能く云はるゝにより、是れを獻上して、日頃の恩に酬ゆることゝせんと思ひ立ち、早速大夫人の御殿へ參上して奉獻した。

大夫人も亦是れを食し給はずして、國王の許に送呈せられた。王は夫人の送物を得て大に歡ばれ、直ちに是れを食せらるゝと、其香美はなか〳〵によろしく到底尋常の果物の比ではなかつた。それで直ちに夫人に向ひ、どうしてかくもめづらしき物が手に入つたかと尋ねらるゝと。夫人は直ちに黃門をお呼びなされて、其出所を尋ねられしに、黃門はありのまゝに事情を言上した。

かくて轉々して、愈々園丁の許から出たと云ふことが解かつた。國

王は直ちに園丁をお招きになつて、汝は我が園中に、かゝる美果あるに何故に我が許に送らずして、かへつて是れを他人に與ふるのであるかと詰問せらるゝと。園丁は、事の次第を詳細に言上して、決して他意なき由を申上げた。然るに國王はその辯解に耳をかし給はずして仰せらるゝやうは、明日より日々是れを獻上すべし、萬一左樣せざるときは、直ちに汝を極刑に處すべしと仰せられた。

國王から極刑に處すべしとの嚴命を聽きて園丁は己れが部屋に歸へつて、大聲を擧げて泣いておつた。すると池の中から龍王が人間の姿をして現れ來り、其方は何故に左樣に慟哭するかと尋ねた。園丁は實は昨日此の池の中で、めづらしき果物を得たので、是れを門監の男に與へたるに、彼れは是れを黃門に送り、黃門は大夫人に奉り、夫人は大國王に獻上せらるゝことゝなつた。爾るに國王は、今後も日毎にこの果

物を上るべし、若し然らざる時は刑戮に處せんと嚴命せられたが、爾かしかゝる果物は、一度は手に入りしも、二度と求むることの出來ぬ類のないものなれば、自分は明日は刑罰を蒙らねばならぬことは必定なり、是れを思ふと、身も世もあられぬ程悲しくてならぬと申した。

龍王は園丁の物語りを聞きて、深く同情の念を起し、直ちに池の中へ這入つて、やがて昨日と同樣の美果を夥しく黃金の盤上に盛り來り、是れを園丁に與へ且つ申やうは、汝、此果物を國王に獻上し、且つ我が言を申傳へよ、我れは昔し國王の親友にて、共に佛の許に出でゝ八齋を受けたものであるが、爾時國王は、戒法を滿足せし爲め所願を果して、今日の果報を受けたるが、我れは是れを守らざりし爲め、今は龍中に生を受くることゝなつたのである。就ては我れは此度身命をすてゝ、再び戒法を守らんと決心せしゆゑ、國王はよろしく八齋戒の經文を求めて我が

許に送らるべし、萬一是れを忘るゝ時は、我れは直ちに王國を覆へして大海となすべし、汝はよろしく此の旨を王に傳へよと申した。

園丁は龍王の敎へのまゝに果物を獻じ、且つ其傳言を申述ぶると、王は非常に心配をせられた。何分にも此時分は佛法が傳つてをらなんだ爲め、とても八齋戒の經文を求むることが出來ぬ、然し是れを得ざる時は、一國は乍ち破滅の不幸を蒙らねばならぬと云ふ難題である。

王が日頃敬重せられてをる一大臣があつた。王はこの大臣を膝下近くに呼寄せて、前條の物語りをなされ、至急に是れを手に入るべしと仰せられた。大臣は、王命は背反し難きも、而も現時はかゝる敎へなければ、とても其經文を得ることは出來難かるべしとて辭退すると。王は無法にも、汝の力にて是れを得ることが出來ざる時は、我れは汝を殺すべしと仰せられた。

大臣は國王より無法の命令を蒙つた爲め、非常に心配しながら家に歸つて來ると、大臣の父は我子の血色の常ならぬ樣子を眺めて不審を立て、其由を尋ねたので、逐一物語りをした。すると老人が云ふやうは、實は自分の宅の座敷の柱のなかに、妙な光りを放つものがあるが、或は此の中に何かゞ收めてあるかも知れぬで、一つ試めしに切つて見るがよいと敎へた。

それも道理と、早速に切つてみると、中から十二因緣經と八齋戒の經文とが顯はれ出でた。大臣は非常に喜び、金案の上に經文をのせて、是れを國王に奉ると、王亦大歡喜し、自ら是れを龍王に送られた。龍王の歡びは又一倍にて、種々の珍寶を賚らして其恩を謝し、五百の龍子と共に懇ろに其法を修したれば其後命終して忉利天上に生れた。

世尊は、右の物語りをあそばされて且つ申さるやうは、昨夜天降つた

五百の天子は、即ち此の龍王の一族なりと。

＊　＊　＊　＊　＊

修道の好機は屢眼前に現出するも、私共は是れを把取せぬ爲めに、遂に何等の効果も收むることなくして是れを逸し去るのである。見よ、受齋の二梵士は確かに其好例ではないか。

善惡の區別は大抵の者でも容易に出來るものであつて、誰とて聖賢の敎へに從ふのが惡いと云ふ者はない。然るに能く其敎へに從ふて一生を過ごすことが出來難いのは、內に煩惱の內魔があり、外に誘惑の外魔があつて、一念發起の道心を惑亂せしむるからである。私共にして若し此の內外の惡魔に打勝つと云ふ金剛心があつたならば、何んのことなしに所願を果すことが出來るのである。されば私共はどこまでも此金剛心を培養せねばならぬことである。

好機一度逸すれば、復容易に歸り來らず。等しく佛の膝下に聞法したる梵士も、此機を逸したるが爲め、遂に龍中に轉生して長き辛苦を嘗めたではないか。是れを思ふと、私共は益此一代の中に是非共に心意開解するまでに聞法せねばならぬと云ふことが諒解せらるゝのである。

二八　純孝の王子

大聖世尊が舍衛國に在しゝ時、阿難尊者が城中を分衞しておると、一人の小供の乞食が、人のなさけを乞ひつゝ、好食を得ると是れを盲目の父母に供養し、麁食を得たる時のみ、自ら是れを食しておるのを見受けた。

阿難は、小供のやさしき心掛けを感じ入り、歸つて是れを世尊に御話

し申すと。世尊は、それはなか〳〵出來難い心掛けであるが、爾し自分が過去世の時に父母を供養したことに比べると、物の數ではないと仰せられた。阿難は世尊の仰せに不審を立てゝ、それは又如何なることでござるかとお尋申すと、世尊は阿難に對し、次の物語をあそばされた。

乃往過去の昔、大國王があつて六人の皇子を持つておられた。それらの皇子は、生長の後各々一國の王となられた。時に、羅睺求と云ふ逆臣が逆惡を興し、大王及び五人の皇子を殺害し、將に第六皇子をも除かんとした。然るに、或鬼神が第六皇子に對し、惡臣羅睺求謀反をなし、汝の父及び汝の五人の兄弟を殺し、今や將に汝に及ばんとす、汝須らく自ら是れに對する謀をなすべしと告げた。

第六皇子は此告を聞き、非常に憂慮し、如何にせんかと苦心せられた。皇子の夫人は、我が良人の常ならぬ顏色を眺められ、如何なればかくも

憂悴あそばさるにやと尋ねらるゝと。皇子は、丈夫の事は、女共の知つたことではないと、一言の下に叱り付けられた。夫人は、それは餘りにあぢきなき仰せかな、ふつゝかに候も、一蓮托生の契を結びし妾に向ひ、隱し立てをあそばすとは、誠に恨めしく存ずと、涙ながらにかきくどかれた。皇子は、左程に申すことならば、御身に告ぐべしとて、さきの鬼神の物語を打明かされた。

かくて皇子は夫人と熟議し、僅かに七日の粮を持つて、獨り最愛の一子をつれて、難を他國に避くることゝせられた。所が餘りに惶怖しておられた爲め、道を誤まり、十日も經つに目的の地に達せられず、其中に粮食はなくなり、水は盡き、三人諸共に殆んど餓死せんとせられた。

此時皇子は倩ら思はるゝには、我等三人共々に命を維がんことは、徒らに苦痛を增すのみにして到底望むべからず、寧ろ此の中の一人を殺

し、他の二人の生命を維がんには若かずと。依て直ちに劍を拔いて夫人を殺さんとせられた。幼き王子は父に向うて合掌し、父上よ、願くば母上を害し給ふことなかれ、私が母上の命に代り申すべしと哀願せられた。父なる皇子は、然らば汝の命を奪ふべしとて、刄を差向けらると。王子は暫しと止めて申さるやうは、父上、一時に我が命を斷たるゝときは、我が肉は直ちに臭爛すべし、かくては萬一目的の地に達し給はぬ前に再び飢餓に迫り給ふこともあらん、されば、それよりも、日々所用の肉を我が身より割ぎ取らるゝ方が良法なるべしと。皇子は如何にもさる方が良法なるべしとて、小王子の云ふが儘に從はれた。爾るに不幸は容易に三人の身より去らず、王子の肉は、唯三臠を餘すのみとなつたが、而も村里に出づることが出來ぬ。此時王子は父母に向ひ、餘れる肉の二片は、兩親是れを食し給ひ、速かに前途を急がるべし、我は他の一臠

の肉に餘命を維ぎ、此處に留まらんと申出された。

爾時釋提桓因の宮殿が大震動した。釋提桓因は、如何なれば斯く震動するにやと、直ちに其因縁を觀察したるに、今の小王子が希有の事を作せるが爲めであると云ふことが解せられた。

それで早速に身を餓狼に化して、途に斃れたる小王子の許に赴き、その肉をあさらんとしたるに、此時王子は心の内に、我れ今此の一臠の肉を食すも餘命を維ぐことは出來難し、されば殘骸の餘肉は我れに益なし、快よく餓狼に與へんかなと。かく決心して、自ら進んで是れが餌食とならんとせられた。

時に釋提桓因は乍ち本身を現はし、小王子に尋ぬるようは、汝は今汝の肉を割きて父母に與へ、それが爲めに命を殞さんとしておるが、それにても汝の衷心に一毫の悔心はなきかと。小王子は、子として父母の

爲めに命を殞すことは、固より其分を得たることなれば、我れに於ては毛頭の恨みなしと述べたるに、彼れは重ねて、然れども汝今現に苦惱するに非ずや、而も尙ほ恨みなしと云ふも、我れは容易に汝の辭を信じ難しと申した。

茲に小王子は至誠の色を現はし、我れは斷じて些少の悔心を有せず、我が云ふ所にして、眞實にして虛妄ならざれば、神も照覽しましませ、我が肉乍ち盛り上つて、平生の時の如くならん、然れども我れにして萬一些かの悔心あらんか、乍ち命を殞さんと誓ひしに。辭の終ると共に、身は本復して元の姿となつた。

釋提桓因は小王子と其父母を守護して、目的の地に送り屆けたるに、其地の國王は小王子の至孝を感嘆して、軍衆を給して本國に還らしめたれば、幾程もなく逆臣を誅して父兄の仇を復し、芽出度一國の大王となられた。

世尊は辭を改めて、爾時、小王子は我が身にして、父母は今日の我が父母の前身是なりと。

* * * * * *

身を捨てゝ事に當るの覺悟あらば、天下の事一事として成功の出來ぬものはない。彼の微力にして當り難しと云ふが如き弱音を吐く者は、此覺悟がない爲めである。爲法不爲身と云ふ訓戒は此邊の消息を示めされたるものである。

私共は曠劫以來幾度も身を捨てたのである。然れども唯惜むべきは、徒らに煩惱の奴隷となつて是れを捨てたるが爲めに、昔の千死萬死は、孰れも犬死となつたのである。然るに今此一生は、幸ひにして遇ひ難き佛法に遇ひ聞き難き念佛を聞くことを得たのである。されば此